# ジュピターガンダム対Zガンダム

defective article

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ジュピターガンダム対Ｚガンダム

【Ｎコード】
Ｎ３２９１Ｋ

【作者名】
ｄｅｆｅｃｔｉｖｅ　ａｒｔｉｃｌｅ

【あらすじ】
戦争は終わり、全てが元通りとなったはずの地球圏。しかし、突如として反旗を翻した木星圏地球連邦軍は木星帝国と名乗り、地球圏に再び戦いをもたらす。そんな中、一体のモビルスーツが眠りより覚醒する。

# 1

少年はキャンバスを前にしていた。右手に鉛筆を持ち、必死に何かを描く。しかし、何かが足りない。少年は近くにあったカッターの刃を出し、キャンバスの絵ごとそれを切り裂いた。

「また、破いてしまったのかい？」

教室のドアの横に立てかかっている少年。二人の少年が互いを見る。生きを荒々しくしていた少年の制服の校章はこの学校の二年制、ということを示していた。

「いつもそうだな、カミーユ・・・君には何もない・・・」

金髪の少年が言った。目には黒いサングラスをしていた。学校の制服を着ていて、胸元の校章からして三年生、つまり、もう一人の少年よりも一学年上、ということだ。顔は整っていたが、彼にはどこか、孤高の雰囲気があり、特定の友人がいない。彼が話すのはこの学校でカミーユのみ。だが、カミーユはこの先輩を好んではいない。むしろ嫌いだ。いつも、見透かしたように自分を見るその瞳が厭で厭で仕方がなかった。

「・・・何の用です、エドワウ・マス先輩」

怒気を少し孕ませて、カミーユが言った。エドワウ、と呼ばれた金髪の青年は笑った。

「感情が現れてしまっているぞ、カミーユ。もっと集中しなければ、君の見る世界を描くことはできない」

「あなたに、何がわかるんですか！？」

ヒステリックに叫ぶカミーユ。いつもいつもいつも！！この人はこうやって！！感情のうねりがカミーユの頭をいっぱいにする。

「・・・」

何も言わずに、ただ微笑を浮かべてエドワウは去った。息を荒くしてカミーユはそれを見ていた。

そしてどれぐらいたったろう。教室は陰っていた。カミーユは切

り裂いた絵とキャンバスを見た。ズタズタの絵。その向こうには何もない。
「・・・畜生・・・」
小さく呟くカミーユ。それを聞いたものはいない。

校門を出てカミーユは帰路を急ぐ。家に急いで帰ったところで待っている家族などいない。それでも、家に帰りたかった、すぐにでも。惨めな自分、それから逃れたくて。
「おい、カミーユじゃないか、あれ」「お、ホントだ」「おーい、引きこもりクーン！今日は学校来てたのー？」「ママん所に帰るのか？」「あっはっはっはっは！！」
うるさいうるさいうるさいうるさい！！黙れ黙れ黙れ黙れ！！
「俺の名前を呼ぶなァァァ！！」
知らぬ間に走っていた。知らぬ間に叫んでいた。目から何かがこぼれていた。泪だ。
そんな自分が惨めで堪らない。
「畜生・・・！！」
口をかむカミーユ。鉄の味が口の中に広がっていく。

家の、扉を開ける。暗がり。誰もいない家。明かりもつけずに自分の部屋にたどり着くとカミーユはベッドに直行する。
ボフッ
身体がベッドの布団に埋もれる。やわらかなシーツが少年の体を包む。世界はこんなにも優しくない、しかし、このシーツは暖かく、受け入れてくれる。
（どうしてだろう・・・）
再び込み上げるものがある。少年は顔をシーツに押し付けた。
「どうしてだろう・・・」
そう、呟いた。

「だってさ、そうだろお、理不尽だよぉ・・・」
嗚咽。すすり泣く声が部屋の中でこだました。
「うぅっううぅ・・・うあああぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」
少年は雄叫びをあげる。悲しみの音色。それは誰の耳にも届くことはなかった。

目を覚ますと、光が目に飛び込んできた。カミーユの心中とは反対に太陽は輝いていた。
起き上がり、飯を食べ、歯を磨き着替える。いつもの行動。そして、学校に行く。行きたくもないのに行く。ただ機械的に毎日を過ごしているだけ。同じ毎日を「経験」するだけ。それに何の意味がある？
（でも、僕はそこから抜け出せない）
心のキャンパスは真っ白だ。飛び立つ鳥も、青い空も、地に立つための大地もない。何もない、真っ白な空間。
鉛筆を握りしめ、キャンパスの前の紙を見る。真っ白。
（何も描けない。何もない。僕には、何もない）
打ちひしがれるカミーユ。
教室のドアが開く。ドアの方を見るカミーユ。いつものように彼が来た、と思った。だが、彼はいなかった。
「あ、すみません」
それは少女だった。校則より短いスカートだったが、それ以外は何の問題もない、綺麗な少女。アジア系の顔をしている美少女、だろう。胸元の交渉から判断すると、彼女もカミーユと同じ二年生なのだろう。
「あの、職員室ってどちらでしょう？」
少女が聞く。どうやら、転入生らしい。珍しいわけではない。ここではよくあることだ。
「ここのちょうど一つ下の階の部屋さ」

「ありがとう・・・何を、描いているの？」
礼を言うと、少女は彼の描いているであろう絵に興味を持ちだした。
「・・・・・」
それに応えず、目をそらすカミーユ。
「何も描けないようね、迷いがあるのね」
エドワウのようなことを言う。そう、カミーユは心の中で愚痴った。
「君に何がわかるんだ？」
「何も。でも、そうやって抱え込んでいては理解なんてされない。ただ、それだけ・・・」
そう言って彼女は去った。カミーユは鉛筆を握りしめて、呆然と立っていた。

家のベッドに転がる。天井に手を伸ばす。届くわけはなかった。いつも、届かない。この手から、こぼれていく。何もかも。
「どうして、僕はここに居る？」
その答えをカミーユは知っている。怖いのだ、殻から抜け出すことが。他人と触れ合うことが。
（だから、僕は逃げる）
シーツを覆いかぶり眠ろうとするカミーユ。
結局、寝ることはかなわなかった。

学校に行くと、男子連中がある話題を話していた。
「今日よ、あのブライト艦長が来るんだってさ」
「へぇ、こんなコロニーにか？」
「あぁ、うひゃー、見てみて―なぁ」
ブライト・ノア。数年前の戦争を終わらせた、ペガサス４の艦長を務めていた。なるほど、男子というものはそういうものに憧れるものだ。英雄、というものに。

「だがよ、ガンダムのパイロットってどうなったんだ？」
「アムロ・レイ、だろ？・・・確か今は連邦の囚人惑星に居たよな」
アムロ・レイ。モビルスーツ、ガンダムのパイロット。しかしながら、彼は英雄としてではなく、反逆者として人々に認知されていた。
「売国のアムロ、か・・・」
「死刑確定してんのにまだ執行されていないからな」
「そうだよなー」
彼の罪はよく、知られていない。一部の説としては、レビル将軍の殺害。果たしてそれが事実かは分からない。確かなことは彼によってガンダムは破壊された、ということだ。
（・・・ガンダム、か・・・）
カミーユは心の中で、それを思い描いた。悪魔のような力。全てを薙ぎ払い、星を焼き尽くす。そんな光景が広がる。
（もしも、もしも、ガンダムを見て、それを描けるのならば、僕の心は満たされるのだろうか？）
カミーユは素直にそう思った。たとえ、夢物語だとしても、彼はそれを望むようになった。

カミーユは放課後、絵をかかずに宇宙港に向かった。そこには人があふれ、我先に、と蠢いていた。その前方には大型の戦艦。
（最新鋭の艦だな・・・連邦はまた、戦争でもするのか？）
カミーユはそう思った。しかしながら、それを見たいと思い、背伸びするカミーユ。隣の人の肩にぶつかった。
「あ・・・」
見ると、いかつい男であった。男はカミーユの首元を掴むと、人ごみを抜け出した。引きずられるままになるカミーユ。
人気のないところに連れて行かれ、カミーユは殴られた。強く、何度も。

口の中に血の味が広がる。

倒れていたカミーユ。そこにやってきたのは、何時かの少女。
「殴り返さないのね」
「・・・・・」
話しかける少女を無視するカミーユ。
「・・・怖い？」
「・・・・・」
「自分が、周りが・・・」
「・・・・・」
しゃがみ込んで、カミーユの瞳を少女が覗き込む。
「何なんだ、君は・・・？」
「あぁ、まだ、言ってなかったね」
少女は笑って言った。
「フォウ・ムラサメよ。よろしく、カミーユ」
「何故、僕の名前を？」
「フフフ、あなたが、選ばれたのよ。世界に」
「？！」
少女の瞳が光り輝く。
「何を…？」
「終局を司りし存在、Z。その鼓動を刻め・・・」
「Z？鼓動？」

コロニーを揺れが襲う。大きな揺れ。何かがぶつかるような衝撃。
そして、爆音。
「なんだ！？」
カミーユは驚き立ち上がる。
「慌てないで」
少女が言った。
「奴らが来ただけよ」

「奴らって、一体!?」
「木星の、人々よ」
二人が見つめる先には巨大な影。それは機動兵器・・・モビルスーツ。それは不気味に宙を浮かんでいた。
「戦争の、再来よ」
少女がそう、告げる。カミーユはその現実に恐怖した。

## 2

「戦争って、いったい・・・！」
カミーユは少女に問いかける。が、少女はカミーユの手を取り、走り出した。
「説明する時間はないわ、来て！」
「何処に、行くんだ？」
シェルターは向こうだろ、と抗議するカミーユ。だが、聞こうとしない少女。
「男でしょ、ギャーギャー言わないの！」
「関係ないだろ！？」
少女と逃げるカミーユ。そこに忍び寄る巨大な影。
「！！モビルスーツ！？」
「ちぃっ！」
驚くカミーユ。少女が舌打ちをする。
（まだ早いし、カミーユのメンタルも万全ではないけど・・・やるしかない！）
「覚悟してね、カミーユ・・・」
「は？」
間抜けな顔をするカミーユ。少女の肩口までである髪がふわりと浮いた気がした。
「・・・・・・・・！！！」
言葉にならない悲鳴を上げる彼女を、カミーユは抱きしめた。そうでもしないと、この状況では怪我でもしかねない。モビルスーツの影が近づく。４０メートルの巨人が、すぐ傍まで来ている。
（終わるのか？こんなところで、訳もわからずに・・・！まだ、僕は、一つも絵を描けていないのに・・・！）
（なら、求めて・・・希望を、Ｚを！！）
脳裏に、少女の声が響く。はっとして彼女を見る。腕の中で彼女は

笑っていた。
（僕の頭に響くこの声は？）
（求めなさい、Ｚを・・・）
何が何かわからない。でも、とカミーユは顔を上げてモビルスーツを見た。理不尽にこんなところで死んでたまるか。そんな思いで彼は叫んだ。
「ゼーーーーーーーーーーーーーーータァァァっァァァーーーーーーーーーーーーーーアァァァ！！！」
（！！　目覚める・・・）
フォウとともに、カミーユの体が浮かぶ。無重力の中に居るように感じる。そうして彼らを何かが包む。緑の、光。
（これは・・・？）
（Ｚの力よ）
（Ｚ？）
カミーユは思念で会話していた。そのことにカミーユは何も疑問に思わない。
（そう、Ｚ。Ｚガンダムの・・・）
（Ｚ・・・ガンダム・・・・？）

緑の光のもとに、集うふたつの機械。それをカミーユは見る。
（これは・・・？）
（乗るのよ、カミーユ）
（君は？）
（もう一つのに乗るわ）
そう言って彼女は二機あるうちの一つの中に消えていった。
カミーユはそれを見た。飛行機のような、それでいて無駄のない形のそれは美しかった。近づくうちに機体が光り出し、気づいた時には中に居た。その中はとても温かかった。
（ぬくもり…？）
温もり、と彼は感じた。さながら、母親の体内を思わせる。丸ま

った彼の体はコクピットのような座席に座る。
「どうするんだ・・・？」
レバーなどの見知らぬ機器が並ぶ。そんな彼の頭にフォウの声が響く。
（それは飾りよ。思念を、思いをぶつけて。Ｚはそれで動くわ！）
「思念で、思いで…いくぞ、Ｚ！！お前の力を見せて見ろおおおぉぉぉお！！」

二機のそれは宙を舞い、緑の閃光となった。そして一つの光となり、やがて一つの形を作っていく。細い骨組の体を、緑色の光が包み込む。
「うおおおおぉぉぉぉぉぉぉぉおおおおぉぉぉおおおお！！！」
それはスマートで、しかし、襲いかかるモビルスーツには負ける気がしなかった。青い身体、赤い翼。神の戦士、と思われるフォルムでそれは立っていた。
「「これがＺガンダムだ！！」」
眼前の敵モビルスーツはそれを見てうろたえる。その隙を見て、カミーユは念じた。
（武器は！？）
（右手に出すわ！）
思念での会話は一秒にも満たない。瞬間的に武器が現れ、Ｚは走り出す。その速さは閃光のようであった。右手に握られる緑色の光の刃が、少し動いたかのように見えた瞬間、敵の体は幾つもの破片となった。
（やった！）
（まだよ！）
同じ敵がまた出てくる。今度は四気がかり。四方向からの攻撃だ。
（くそぉ！）
（落ち着いて、Ｚなら負けない）
光の刃を構え、駆けだすＺ。カミーユは腕を振り下ろす。光が敵

の腕を切り裂く。
（左！）
そう、呟いたカミーユ。Ｚの左腕に新たな武器が握られている。それはライフルのようなものであった。カミーユはそれを三方の敵に放つ。素早く、かつ、的確に。コンマ０秒の差もなく、敵が爆散する。
（！　カミーユ！下・・・）
そう、フォウの声がした瞬間に立っていた場所が爆発する。それによってＺは吹き飛ばされる。
「きゃあああぁっぁぁぁぁあ！！」
「フォウ！！」

爆発による衝撃で、思うように立てないＺ。そこに降り立つモビルスーツ。それは先ほどの機体たちとは比べ物にもならない、禍々しいオーラを放っている。
「よもや、ガンダムが我々の行く手を阻もうとはな・・・」
男の声が響いた。
「しかし、ガンダムはもはや必要のない存在。時代の波の中に消え去るべき存在なり・・・！」
緑色の機体がＺの顔に右手に備わったツインライフルを構えた。
「木星帝国騎士バイファーン・ダーナン、そして我が愛機パラス・アテネの前に消え去るがいい！」
カミーユはそれを見ていることしかできない。フォウが気を失ったのか、応えてくれない。
「フォウ！くそ、動け、Ｚ！動けよ！」
答えないＺ。敵の銃身が、Ｚを捕らえる。
「消え失せろ、ガンダム！！」
「待てぃ！」
敵の腕からツインライフルが弾け飛ぶ。パラス・アテネは攻撃してきた方向を見た。そこには燃え盛る炎を後ろに立つ、赤い機体の

姿があった。
「木星帝国の蛮行、許すまじ！」
「何奴！？」
その赤い機体は両腕を組んで、仁王立ちした。
「貴様に名乗る名は、ない！！」

## 3

「貴様に名乗る名は、ない！！」
そう言って赤い機体が飛び跳ねる。Ｚの前にそれは立つ。
「無事か、カミーユ？」
「！？その声、エドワウ先輩・・・？」
「いや、私はクワトロ・バジーナだ」
バイファーンが驚く。
「クワトロ・バジーナ！？あの、赤い彗星・・・？！」
構えるパラス・アテネ。それに銃口を向けるクワトロの赤い機体。
「フン、仮にそうだとしても、木星の騎士が背を向けて逃げることは・・・」
背部から剣を引き抜き、駆けだす。
「ない！！」
飛び跳ね、赤い機体に迫る緑の機体。それを受け止める。
「真剣白羽取り、だとぉ！？」
「次は、こちらの番だな・・・！」
背部にマウントされていた大型バズーカが空中に放たれ、それを飛び上がりキャッチする。
「行け！シュツルムラケーテン！！」
爆風を噴き起こし、パラス・アテネを襲う。パラス・アテネはシールドを構えて防御する。
「くぅ・・・！」
シールドが砕け散る。パラス・アテネは戦場を離脱した。
「・・・これは逃げるのではない、戦略的撤退だ・・・」
恥辱の表情を浮かべバイファーンは撤退した。
クワトロは機体を動かし、Ｚを起こす。
「無事か、カミーユ、フォウ」

「…はい」
「はい」
「二人とも無事か、ならばいい。一先ず、我々も引き上げるぞ」
「引き上げるって一体・・・」
「カミーユ、事情は後だ。来い」
そう言って飛び立つ赤い機体。それに続くZ。
「カミーユ。移動形態に変形して」
「移動形態？」
「念じて、よりスピードを、と」
「・・・よし」
その瞬間、Zは変形し、鳥のような形態となる。
「・・・ほう、もうZをあれほどな」
感心したようにクワトロが言った。
「これからどうするんですか、エドワウ先輩」
「…クワトロだ」
「・・・・・・クワトロさん」
「機体を隠す。そして、君は日常に戻れ。詳しいことは追って知らせる」
「・・・・・・」
「不満か・・・だが、今はそうしたまえ」

結局、何一つ説明せずに、クワトロは去った。カミーユはフォウと共に残された。
「それで、何事もなかったかのようにしろって？」
「そうよ」
「・・・」
「・・・また、明日」
そう言ってフォウも去って行った。

家に帰る。やはり、明かりは付いていない。人も居ない。ベッドに倒れるカミーユ。今日のことが嘘のように思えてくる。
（そうだ、これは夢なんだ。僕が、戦争なんて、な・・・）
寝返りを打つ。真っ暗やみの中、カミーユは人知れず涙を流していた。
（なんで僕なんだ…）
否定したい現実。だが、あのガンダムを見た時、カミーユは、これなら駆ける、と実感した。自分にも英雄願望があったのだと知り、自嘲する。
（明日、か・・・）
カミーユは深い眠りへと落ちて行った。

翌朝。学校に行くと、生徒の多くが欠席であった。無理もない。市街戦で負傷者は多かった。むしろ死者が出ていないだけましだ。情報によると、攻めてきたのは木星圏地球連邦軍。通称「木星帝国」・・・パプテマス・シロッコ大佐という若き将校を中心とした集団。木星エンジンという優れた技術を持ち、地球連邦軍とはまた別の勢力へと発展していた。
今回の反乱に連邦は対応できず、木星ルート上のコロニーは制圧されたらしい。後手後手に回った連邦軍は早期打開を目指しているが、転載と言われるシロッコには敵うわけがない。
それが知り得た情報だった。
学校はさっさと授業を終わらせ生徒を返した。カミーユもそれに従い帰ろうとすると、呼び止められた。
金髪の男、エドワウだ。
「少しいいかな、カミーユ」
「・・・ええ」
エドワウに従い歩いて行く。エドワウの足が止まったので見上げ

ると、そこは邸宅だった。
「上がってくれ」
「・・・」
エドワウの家、のようだ。そこにカミーユは入って行く。入ってしばらくすると、リビングに入った。ソファーが目に入り、そこに腰かけるようにエドワウが言った。素直に腰を下ろすカミーユ。
「昨日の事件のことは知っているな？」
「木星帝国、ですね」
「うむ。それと、Ｚについて、だ」
「・・・・・・・」
「君は神を信じるか？」
エドワウはそうカミーユに聞いてきた。試すような目つきをしていた。
「・・・宇宙世紀に入り、神の概念は消え去りました。僕も神なんて信じてはいませんよ」
嘲るように言った。それにエドワウは笑った。
「そうだな、だが、神はいる。そう、厳密には神ではないがね」
「信仰されていれば、それは神・・・と？」
「そうだ。それがパプテマス・シロッコだ」
「天才だから、ですか？」
エドワウが立ち上がり、どこかへ消える。しばらくすると、コーヒーを持って現れた。それをカミーユの前に置くと、自身のコーヒーを飲んだ。
「パプテマス・シロッコ・・・調べてみると、同名の人物が何人もいる。いずれも今はいないがね」
「・・・それで？」
「私はこう考えている。シロッコはクローン技術で一世紀以上生きているのではないか、と」
「・・・・・・・」
「全ては、地球圏を己がモノにするための、計画」

さて、と息をつくエドワウ。
「ここからが本題だ。私と、仲間たちは彼らの襲来を予期していた。と言っても確証はなかったため、連邦は動かないことは知っていた。我々は廃棄されたメイオウガンダムの残骸を入手した」
「メイオウガンダムはアムロ・レイによって破壊されたはずじゃ・・・」
「そうだ。だが、彼が破壊したのは表面の身にすぎなかった。真の意味であれを破壊することなどできなかった。基礎フレームの回収により、我々はそのオーヴァーテクノロジーを解析。Ｚの完成に至った」
「・・・パイロットは？」
「・・・そこが問題だった。二機のうち一機はフォウに反応した。しかし、残りの一機は誰も受け入れなかった。・・・私たちもわからぬが、木星エンジンは人を選ぶ」
「機械が、選ぶ・・・？」
「そう、あれはただの機械では無いのだ。・・・ガンダム。そう、ガンダムなのだ。世界を、宇宙すら破壊できる、神のごとき存在・・・」
「それがどうして僕に・・・」
「定め、かもしれないな」
「そんな・・・」
「選ばれた以上、仕方のないことだ。宇宙の滅亡にかかってくる話だ。・・・君には重すぎる話ではあるがな」
「・・・時間を、ください」
「いいだろう、だが、時間は少ない。木星の魔の手はすぐそこまで迫っているのだから」

カミーユが去っていくのを窓から眺める。
「宇宙すら滅ぼす力、ガンダム。それは一つではない・・・木星にも存在する。それを止めなければならない」

そのためには、Ｚだけでは足りない。あの男が必要である。

「アムロ・レイ・・・」

## 4

囚人惑星とあだ名されるフィフスルナ。資源衛星を改造し、政治犯・重罪人を収容する牢獄となったのはごく最近のことである。小型コロニーと、衛星部分に分かれ、囚人たちはコロニーに詰め込まれて、労働の際に衛星に移され、資源採掘をやらせられる。人権などない、地獄のような場所である。

そこに彼は居た。戦争終結とともに、彼は捕まった。そして、投獄された。しかし、彼は抵抗はしなかったし、弁明もしなかった。ただ、黙して従った。彼の名はアムロ・レイ、といった。

両手足を思い枷でつながれ、拘束されているものの、そんなこと苦でもないかのように彼はふるまった。ただ黙し、鋭い目つきで看守を見るのであった。

囚人同士のいざこざに彼は巻き込まれるが、ことごとく相手を返り討ちにし、殺したことすらあった。彼は一言もしゃべらず、笑いを微かに浮かべていたと言う。

死刑囚であるアムロだが、彼の刑が執行されることはなかった。彼は犯罪者ではあったが、あの、ガンダムのパイロットであった。有事の際には彼を使うことも辞さない、ということである。

木星の攻撃は連邦上層部に大きな危機感をもたらした。このままでは、一年戦争のジオンとの戦いの二の舞だ、と。そこで彼らは不本意ながら、男の釈放を命じた。彼らとて年月を無駄にはしなかった。新型モビルスーツの件増は秘密裏に行われていた。その中には、アムロ・レイ用のものすらあった。

このような事情から、アムロ・レイは釈放されたのであった。

アムロ・レイの枷は外されたが、代わりに首に小型爆弾をつけら

れた。命令違反は即ち死、ということだ。だが、この男にはそんな脅しは意味がない。それはわかっていたが、それでも対策はしておかなければいけなかった。
　牢獄を出たアムロを迎えたのは、一人の女性士官であった。制服に乱れはなく、きちんとしている。女性としての美貌を備えているが、色気のない恰好である。融通の利かないお嬢様、そんな印象をアムロは抱いた。アムロを見つけると彼女は敬礼する。
「アムロ・レイ大尉ですね？」
「大尉？・・・タヌキども、俺の階級上げたらしいな」
「・・・では、参りましょうか」
「・・・どこへだ・・・」
「・・・戦場、ですよ」

　そのままシャトルへと向かう。
「で、俺の所属は？」
「我々カラバの一員となってもらいます」
「カラバ？・・・知らんな」
　シャトルが発信体制へと移る。隣の女性士官の雰囲気がぴんと張る。
「・・・シャトルが、怖いか？」
「い、いえ・・・そういうわけでは・・・」
「・・・根っからのアースノイド、か」
「・・・すみません」
「謝ることはない。安心しろ、宇宙では地上と違い墜落はしない。ま、遭難はあるがな」
そうおどけるアムロ。女性士官は間の抜けた顔をする。それをアムロが不思議そうに見る。
「どうした」
「いえ、もっと・・・犯罪者、という感じの方かと思ったので…」
「・・・あんた、名前は？」

「ベルトーチカ・イルマ中尉です」
「そうか、よろしく中尉」
そう、手を差し出すアムロ。ベルトーチカはおどおどしながらも、その手を掴み、握手した。シャトルが発進する。すぐに無重力となり、彼女の体が浮く。その手をアムロが引く。
「ベルトは締めておけ」
「・・・はい」
席に戻されると、素直に彼女はベルトを締めた。
「それで、カラバに着いて話させていただきます」
落ち着いたのか、ベルトーチカがそう言って来た。アムロは黙って頷いた。
「カラバは、地球圏内の反乱に対応するために作られた部隊の一つです。エリート部隊ティターンズというのがありましたが、ほとんどが木星圏の出身者であり、元から彼らは思想的に・・・危ないと上層部は考えていました」
「木星の指導者、パプテマス・シロッコ」
「はい。そこでジョン・バウアー議員とアナハイムの協力で結成されたのが、現カラバ、ということです」
「アナハイム・・・確か、簡易木星エンジンを作った・・・」
「そうですが、それが何か…」
「いや、きな臭いな。連中も木星帝国に関係してるんじゃないか？」
「・・・」
「フン、やはりな」
「それで、これからですが・・・」
「俺のモビルスーツがあるんだろ。でなければ、俺が駆りだされるわけがない」
「・・・お察しがいいですね」
「・・・」
「二時間後に到着しますのでまた詳しいことはそちらで」
「あぁ、わかった」

そう言ってアムロは眠りに落ちた。ベルトーチカも目を閉じ、そのうち眠りに落ちた。

## 5

鉛筆で細い線が描かれる。線は結ばれて、絵になっていく。そして、それはリアルになっていく。心を落ち着かせてカミーユはそれを描いていた。あの、Ｚと呼ばれる巨人を。不思議と落ち着いている。

「出来た・・・」

思えば初めてかもしれない。絵が完成したのは。

「だけど、違う・・・」

しかし、その興奮もすぐに冷めてしまった。違う。カミーユが描きたいと思ったのは、こんな絵ではないのだ。彼はやはりカッターでそれを切り裂いてしまった。

「違う！違う！こんなのじゃない、こんなのじゃぁ・・・！！」

叫ぶ。ただ、叫ぶ。その叫び声は放課後の校舎の中に虚しく木霊した。

家に帰る。誰も居ないはずであった。しかし、いつもとは違った。彼女が居た。

「こんばんわ、カミーユ」

「フォウ・ムラサメ・・・！」

少女はさも当然、という風に彼の部屋に居た。ベッドに寝そべり、無防備な彼女に、カミーユは怒りの視線を向けた。

「僕の家に入るな！」

「怖いんだね、他人が」

「悪いか、怖くて悪いのかよ！」

「いいえ、人間ってそういうものだよ」

少女が起き上がる。ミシ、とベッドが唸る。

「決心はついた、カミーユ？」

「はっ、僕がＺに乗るかって？フン、ごめんだね」

「・・・逃げないで」
去ろうとするカミーユの腕を掴むフォウ。
「それは、運命なのよ」
「運命？は、そう言うのが一番嫌いなんだよ」
そう言って彼女の手を振りほどいてカミーユは走り去っていく。
フォウはただそれを見ていただけであった。

家を出て街をさまよう。思えば、このコロニーに愛着なんてない。あるのは言いようのない絶望。
ふらふら歩くカミーユ。そんな彼に目をつける不良たち。しかし、それにも気付かず彼はただ歩き続ける。
「おい、お前。金出せよ」
不良の一人がそうカミーユに声をかける。カミーユには聞こえていない。不良はカミーユの腹を殴る。ぐはっ、とカミーユが唸る。不良たちがカミーユを路地裏へと連れて行く。
「無視するたぁ、いい度胸だな」
そう言って指を鳴らす男たち。カミーユが狂ったように笑いだす。
「！？何がおかしい！」
起こってそう不良どもが言った。それと同時に複数の拳がカミーユを襲う。それをまともに受けるカミーユ。しかし、彼は耐えた。倒れることはなかった。
不良たちは恐怖した。
「笑ってやがる…？」
微笑を浮かべるカミーユ。目がきっと開く。そして拳を握りしめて不良たちに向かっていく。
不良の一人が立ちふさがる。その顔目掛けて拳を振り下ろすカミーユ。顎が砕ける音がした。ゆらりとふらつき近くに居た男の目を潰す。絶叫を男が上げた。
男たちは苦しむ仲間を見捨てて逃げだしていった。カミーユはた

だ、笑っていた。
「ほう、いい面構えだな」
ふとそんな声がした。振り向くと、男が立っていた。危険なオーラを孕ませた、男。屈強、ではない。だが、どこか危険である。
「カミーユ・ビダン、だな。俺はアムロ・レイだ」
「！アムロ・・・レイ？」
「そうだ。ちょっと付いてきてもらうぞ」
「断る。俺は関係ない！」
「俺が困るんだよな」
そう言って首をさするアムロ。何かが光っていた。
「来てもらう」
「うわあああぁっぁぁ」
叫びながら突進するカミーユの腕をとり、背負い投げをするアムロ。飛ばされるカミーユ。激痛が走った。
「世話かけやがるぜ、全く」
カミーユの視界が闇に覆われた。

「全くついてそうそうの命令がガキ捕まえろとはな」
「・・・」
カミーユをおぶってそう呟くアムロ。ベルトーチカはその一歩前を黙々と歩いていた。
「それで、カラバの幹部ってのはどこに？」
「今来られています」
「なんでまた、こんな田舎コロニーなんぞに」
「・・・」
「フン」
アムロ達がある家に入る。そこは地下につながる道があった。
「ほう・・・」
「この奥です」

二人は地下に入っていく。しばらく進むと二人の男が現れる。ベルトーチカが敬礼する。
「ベルトーチカ・イルマ中尉です」
「通れ。クワトロ少佐が待っている。後ろの二人が例のあれか」
「はい」
「わかった。お前たちも通っていいぞ」

歩いて行った先の重い扉。それが音を立てて開く。そこにあったのは。
「へぇ、ガンダム、か・・・」
「はい。Zガンダム。カラバで秘密裏に作られた機体です」
「だが、俺の機体ではないな・・・この小僧のか？」
アムロが問いかける。
「そうだ」
ベルトーチカでは無い声が答える。ベルトーチカが咄嗟に敬礼する。
「へぇ、カラバのトップはあんたか」
出てきた金髪の男、エドワウを見てアムロはそう言った。
「クワトロ・バジーナ少佐だ」
「クワトロ？フン、気取った名前だな」
「・・・」
「お前の姉さんは元気かい？」
「一応な。連絡はないが…」
「ならいいがね。で、俺をムショから出した理由・・・教えてもらうぜ」
「いいだろう、来たまえ」
そう言って歩き出すクワトロに従うアムロとベルトーチカ。
「ああ、カミーユはそこに。スタッフが迎えに来る」
そう言ったので乱暴にカミーユを下ろすアムロ。それを見てクック、と笑うクワトロ。
「相変わらずだな。だから姉上に振られたのに…」

「うるさい糞ガキ」
そう毒を吐くアムロ。再び歩き出す三人。
「我々は君が破壊したガンダムより三つのガンダムを作りだした」
「へぇ！俺が壊したのを、ねぇ」
「残念だが完全には壊れていなかったからな。一つはもう君も見たZガンダムだ」
「メイオウは殺したと思ったんだが、甘かったか」
「そういうことだ」
クワトロが止まる。アムロも足を止める。ライトが何かを照らす。赤いモビルスーツ。Zに近いが、どこか昔のガンダムの面影がある。
「私の機体、ガンマガンダムだ」
「・・・趣味が割いな、赤・・・血の色、か？」
「情熱の色、と言ったら笑うか？」
「あの頃よりは融通がきくな・・・」
そう笑う二人に少し戸惑うベルトーチカ。
「お二人は以前どこで・・・」
「秘密だよ」
そうおどけるようにクワトロが言った。素直に口を閉ざすベルトーチカ。
「ずいぶん偉いもんだな、少佐殿」
「それほどでもないさ」
肩をすくめる。
「実際、これもZも私の自費での開発だ。連邦軍の体質は今も変わらないよ」
ライトが消える。また歩きだすクワトロ。
「さて、ではもう一機のガンダムを見るとしようか」
「つまり、それが俺のってわけだな」
「そう、そしてそれは君にとって懐かしいものだ」
「へぇそうかい」
立ち止まるクワトロ。薄く浮かぶシルエットを見てアムロは目を

見開いた。
「紹介しよう、君の機体・・・ブラックメイオウだ」
ライトの光がそれを照らす。黒光りするその機体はまさに彼の記憶のままであった。悪魔のような外見。赤く光り輝くその目がアムロを見る。
「へぇ・・・おもしれぇな」
アムロは顔を歪ませる。狂気の笑みを浮かべるアムロ。よみがえった悪魔と、最狂の男が再び廻りあったのであった。

カミーユが目を覚ますとそこは見知らぬ場所であった。だが起きてすぐに彼の視界にある人物が入ってくる。
フォウ・ムラサメだ。
「ここはどこだ・・・俺をどうする気だ!?」
「少し強引だけど、カラバに徴兵されたのよ。ついてきて」
そう言うと手を引いて促される。渋々彼は起き上がる。ベッドの上で寝ていたらしく、ギシギシとなった。
「言っとくが、僕は乗らないぞ・・・」
「でも、そうも言ってられなくなったわ」
「・・・どういうことだ?」
「木星帝国が宣戦布告してきたのよ。正式にね」

『地球連邦軍並びに地球圏に住む全人類に告ぐ。私は、パプテマス・シロッコ。木星圏地球連邦軍大佐である。我々は長き間、この時を待った。今の地球圏は混迷を極めている。ジオン帝国の仕掛けた独立戦争、その後のモビルスーツの量産による紛争の激化、連邦の腐

敗・・・何故、このようになったのか・・・全ては正しきものが世界を導いていないためである！
故に、我々は！立ち上がった！真の秩序と、平和をもたらすために！今こそ、旧世紀より続いた悪しき人類の歴史に終止符を打つために！
しかし、私が世界を支配する器、というわけではない。我らの木星帝国をすべ、全人類の頂点となるべきお方は別にいる。私は、そのお方を紹介したいと思う。ハマーン・カーン様だ』
映像の中で語り続ける、若い男。その男から映像は少女に映る。桃色の髪をした可憐な少女。その少女の前に頭を垂れるシロッコ。
『私が木星帝国皇帝 ハマーン・カーンである。先に述べたように、我々は未来を切り開くために立ち上がった。その覚悟は固い。我々は戦争をすることさえ辞さない。今こそ戦いのとき。
私は今ここに地球連邦軍に対する宣戦布告をする！』
映像はそこで終わった。カミーユはただ黙ってみていた。
「Zはあなたを選んだ。あなたにしか乗れないのよ、Zは」
「・・・・・・・」
「もう、見て見ぬふりはできない。逃げることはできないのよ、カミーユ」
「・・・・・・・」
唇をかみ、俯くカミーユ。
「情けないな、お前は」
後ろから声がした。その男は先ほどカミーユを気絶させた張本人である。
「アムロ・レイ・・・！」
キッ、と睨むカミーユ。それに動じずに近づくアムロ。
「逃れることはできないぜ、戦いからはな」
「・・・運命だから、ですか？」
一応目上ではあるから敬語は使った。だが、瞳は敵意に満ちていた。

「運命、ね、俺はそんな安直な言葉でカタつける気はないさ。ただな、男は戦わなきゃいけない時があるってことだ・・・止めた、ガラじゃねぇ」
苦笑するアムロ。なおもカミーユは睨む。
「ま、反抗しておけ、少年。それが、若者の特権だ」
「少年じゃ、ありません。僕は、カミーユ・ビダンです」
「ふん、生意気に男のような言い草だな」
「やってやりますよ、乗ってやるよ、Ｚガンダム」
「・・・カミーユ」
「決まりだな」
心配そうなフォウと、してやったりのアムロ。
「今日からは仲間、ということだ・・・しごいてやる、覚悟しろ」
そう笑ってアムロは去って行った。

大人は勝手だ。そう思う。でも、子供心に理解していた。逃げられないであろうことは。だから、乗ることに決めた。それだけだ。
（何してんだろ、僕は・・・）
あてがわれた部屋で、彼はそう心の中で呟いた。
心のキャンパスには何も描かれてはいない。ただ、真っ白な空間が広がっていた。

## 6

アムロ・レイは今、モビルスーツに乗っている。とはいっても仮想空間・・・所謂シュミレーターの中ではあったが。そこで彼が見ていたのは、仮想空間の敵機ではない。
かつての敵たちの姿であった。迫りくるモビルスーツ。それを圧倒的な力で倒すアムロ。だが、敵は湧いてくる。
「ちくしょお、ちくしょおおおおおおおお！！！」
腕より放たれる閃光が敵を焼き尽くした。そこで、アムロは気付く。
「俺は…なんて取り返しのつかないことを・・・」
そう呟いて、彼は気絶した。

「アムロ大尉の気絶の理由は精神的なものでしょうか」
医務室に運ばれるアムロを見て、ベルトーチカがクワトロに聞く。
「あの頃から彼は何一つ変わってはいない。いや、変わってはいけない。そう思っているのだ。彼は戦争犯罪人・反逆者と呼ばれ、憎悪を受けてきた。しかし、彼は加害者ではない。彼は人類の購うべき罪を押しつけられたにすぎない」
「・・・わかりかねます」
「少し、難しいことを言ったな。それで、カミーユの方は？」
「情緒が安定しませんが、シュミレートはほぼ完ぺきです。あれを才能と呼ぶんでしょうか」
「・・・才能、か。それを持つ者と持たざる者、どちらが幸せだろうな・・・」
またも意味深な言葉を言うクワトロ。その真意を測りかねるベルトーチカ。クワトロはそんな彼女に何も言わずに立ち去った。
地球への木星帝国の侵攻は水際で止めている状況だ。今のうちに

カミーユ、アムロ両名を使える状況にする必要がある。来るべき戦いはすぐそこまで迫っているのだから。
「木星もまた、ガンダムを作っているはずです」
クワトロはモニターの男に行った。クリーム色の髪とひげをした初老の男性。ブレックス・フォーラ。クワトロ、いやエドワウ・マスの後見人にして、カラバの最高責任者である。
「破滅の福音、ガンダム・・・・それを止めるために、我々もまた神を創り出した」
「あるいは、悪魔か…」
「いずれにせよ、エドワウ、いやクワトロ・バジーナ少佐。時は迫っている。シロッコの計画が果たされることだけは阻止しなければならぬぞ」
「承知しております」
それで会話は終わった。クワトロはサングラスを外し、眠りに入るように目を閉じた。

アムロ・レイの悪夢は続いていた。戻らない時間を悔いる彼にレビル殺害の罪が着せられた。もはや、逃げ場はなかった。だが彼にはやることがあった。そうしなければ、世界は、宇宙は滅びるから。彼は単身、メイオウガンダムを駆り、宇宙をかけた。愛した女性すら遠のき、孤独となった。仕組まれたレールを走っていただけにすぎないアムロは、最後の抵抗をした。
メイオウの破壊。
メイオウの木星エンジンを暴走させ、全てに終止符を打つ。アムロは震える指でそれをする。アラームが響く。これで終わる。そう思った。だが、メイオウは自爆しない。暴走などしないのだ。
「何故、何故！」
そう叫ぶアムロ。ならばとメイオウを操りそれで己の体を破壊する。破片が飛び散る。原子も残さず分解・消滅する攻撃でメイオウ

を消す。
しかし、アムロは生き延びた。否、生かされた。
「殺せ・・・殺せ・・・殺せーーーーーーーーーーーーーーーぇぇぇぇぇ！！！」
悪夢はそこで終わる。

「アムロ大尉、大丈夫ですか？」
「ベルトーチカ中尉か・・・」
目を覚ます。どうやら医務室らしい。あの後、俺は気絶したのだな、と思ったアムロ。無理もない。あの悪魔に、シュミレーションとはいえ、乗ったのだ。感情でどう思おうが、肉体はあの恐怖を覚えている。克明に。
「フン、ざまァない」
「え？」
聞き取れず、ベルトーチカが聞き返す。
「ざまァないってね。自分自身に。カミーユにああ言っておきながら、俺は逃げている・・・。汚い大人だな」
「・・・・・・」
「さて、どうしたものかな・・・」

カミーユは学校の美術室に居た。あの後も、学校に入っている。日常で変わったのと言えば、家ではなく、あのカラバの施設が生活拠点になったぐらいだ。後は変わらない。コロニーはあの襲撃以来、攻撃はない。そのせいか、人々は平和を謳歌している。先日の傷を忘れ、今起こっている現実を知ろうとしない。
（人間は痛みを忘れていく・・・）
拳を握る。鉛筆を手に押し付ける。次第に痛みが増していく。
「・・・生きてる」

そう実感するカミーユ。彼の前のキャンバスには絵は描かれていなかった。

帰り支度をすると、フォウが現れた。

「カミーユ、私を避けている」

「・・・避けてないさ」

「いえ、避けてる。私以外も。何故、他人と触れ合おうとしないの？」

「しつこいな」

「だから、絵も描けない。未来の展望も、願望もない」

「君に、何が分かる・・・」

「わからないわ、何もね」

「・・・・・・」

（何だよ、逃げて悪いのか・・・）

「Zには乗る。それでいいじゃないか」

「・・・」

無言でフォウは去っていく。カミーユはその背中に語りかける言葉を持ってはいなかった。

木星帝国戦闘揚陸艦アレキサンドリア。歴史上その偉大な功績でこの時代でも知られる、かのアレキサンダー大王の名を冠するこの艦にバイファーン・ダーナンはいた。

「中佐、あのコロニー・・・このままで良いので？」

上官にそう告げるバイファーン。彼は先のコロニー襲撃で唯一生き残った木星帝国の兵士であった。

「良いわけではないが…大佐にもお考えがあってのこと、我らはその決定に従うのみ」

「・・・・・・」

「堪えよ、バイファーン。我らはそうして時を待った。何年もな。それと比べればこのような時間など、短いものだ」
中佐の顔のしわが深くなる。
「待て、バイファーン。さすれば、道も開かれよう」
（待つだけでは変わらない・・・！）
バイファーンは焦っているのだ。あの敵の存在を、誰も知らない。今叩かなければならない、というのにだ。あれは、帝国を脅かす。そう直感が告げていた。だからこそ、彼は焦っていた。かれの直感は当たるのだ。
そこにひとつの連絡が届く。中佐がそれを読んだ。
「喜べバイファーン。攻撃命令が下りた」
「！　誠ですか」
「うむ。攻撃は２１００時から行う。バイファーン、見事戦火を打ち立てよ。カラバという、重力に魂惹かれる者たちに鉄槌を下すのだ」
「はっ！」
バイファーンは緑のパイロットスーツに身を包む歩き出す。眼前には彼の愛機、パラス・アテネが立っている。正義に盲信する青年の決意は固く。
「待っていろよ、ガンダム」

## 7

警報が鳴り響く。それは敵襲、ということだとすぐに理解するカミーユ。シュミレーションである程度離れたが、戦いたいとは思わない。

「戦争なんか、誰がするかよ・・・」

そうぼやく。だが、戦わなければコロニーは沈む。それは自分たちの死につながる。カミーユは渋々、カラバの秘密ドッグに来ていた。

「カミーユ、最初からガンダム状態での出撃だ。行けるな？」

パイロットスーツ置き場に行くカミーユ。先客が居た。赤いパイロットスーツのクワトロが言った。カミーユもまた、パイロットスーツに着替えていた。

「フォウは？」

「もう乗っているだろう。急ぐぞ」

「・・・はい」

カミーユが明らかに嫌な顔をする。クワトロは笑って言った。

「カミーユ、私を怨んでくれても構わない。だが、死ぬな。いいな」

そう言って出ていく。カミーユも急いでそれに着いて行く。

敵が来た、それは直感的に分かった。アムロ・レイは身体を起こす。そして、フッと笑った。

「まさか、俺がガンダムをまだ、恐れているなんてな・・・」

医務室のベッドから身体を起こす。そこにベルトーチカがやってくる。

「アムロ大尉、退避しますが歩けますか？」

「退避？」

「はい」

アムロが笑いだす。困惑するベルトーチカ。

「ブラックメイオウで出る」

「そんな、あなたには、まだ・・・」
まだ、できない。そう言おうとして止める。アムロの目は自信で満ち溢れていた。
「奴らに思い知らせてやる。本当の戦いを、本当の恐怖をな・・・！」

戦闘は木星側に有利であった。カラバの量産モビルスーツ、ネィモ。オーヴァーコスト気味なガンダムタイプの劣化コピーであり、ロウコストのため多く配備されている。とはいえ、木星のモビルスーツには敵わない。
バイファーンのパラス・アテネは背部フレームに備わっている大型ミサイル八発を宇宙港に放った。逃げ惑う人々とシャトルをその爆発は巻き込んだ。
「これで逃げられはしない」
得意げなバイファーンのもとに通信が来る。
「ちょっと、バイファーン！ミサイル全発撃つ必要ないでしょぉ！」
「うるさいサラ！お前は俺に着いてきてサポートしてりゃいい！」
「ふん、私より偉いって言ったって中尉じゃない！私は少尉よ！」
桃色の髪の少女、サラが言った。笑うバイファーン。
「まぁいい。・・・そろそろ本命が来るだろうな。メスを呼べ」
「了解」
サラの機体は深緑色のずんぐりした機体であった。他のモビルスーツより頭一つ分小さい。頭が大きくなっているのは、情報機器が多く備わっているためだ。情報戦用のモビルスーツ、ボリノーク・サマーン。
「メス！そろそろ合流して！」
「・・・了解」
か細い少女の声。彼女はメナッサ・ウェイ。バイファーンやサラ

の幼馴染であり、仲間である。
「さぁ来い、ガンダム。俺たちで叩きのめしてやる！」

ガンマガンダム、Zの二機が背中合わせに敵と戦っていた。相手は敵量産型機バーザム。青い機体であり、それが十数機も群がってきた。
「行くぞ、カミーユ！」
「はい」
ガンマガンダムが腹部よりビームを放つ。それが一気に命中する。両手のバズーカを構え、ガンマガンダムがそれを打つ。二機に当たる。それを流れるように、無駄なくクワトロはやっている。
一方のカミーユは腰のビームガンや携行していたライフルで敵を打っているが、なかなか当たらない。
「集中して、カミーユ！」
「わかってるよ！」
心を研ぎ澄まして、心眼で撃て。そう、クワトロさんは言っていたな。訓練でのことを思い出し、集中してみる。バーザムが、来る。そこにライフルを撃つ。
ビームが貫いた。爆発するバーザム。更に襲いかかるそれをビームソードで斬り伏せていくZ。
「戦いなんてしなければ！死なずに済んだのにぃぃぃーーーーー！！」
そう喋っていた。この、理不尽な現実に向かってカミーユはそう、叫んでいた。

数秒後には、バーザムは一掃され、二体のガンダムの身がそこに立っていた。
「・・・死んでいく。こうやって、皆・・・」
そう呟き、自身の体を抱くカミーユ。寒い。そう、寒いのだ。体で

はなく、心が。Ｚはそれを暖めては、くれない。

アムロ・レイのブラックメイオウの力は圧倒的であった。宇宙空間に逃げる敵の前に瞬間移動する。そのあまりにもけた外れな性能に木星の者たちも驚愕する。

「これが、真のガンダムだ」

そう言ってアムロは腕を振り下ろす。メイオウの腕より、破壊の光が出る。それがバーザム達を包み込む。

「泣け、喚け！そして悔いるがいい！メイオウに逆らったことを！」

アムロは極度の興奮状態に居た。訓練では気絶した。だが、実践ではそうはいかない。本物の命のやり取り。それはアムロをかつてのアムロに戻していた。

「ん。ハエか・・・」

モニターに現れる紫色の機体。先ほどの雑魚とは違うらしい、とアムロは見た。だが。

「俺とメイオウの敵ではない」

「よし、メス。お前は正面だ。サラ、援護してやれ。俺が後ろから行く」

「了解」「・・・了解」

ブラックメイオウの正面に回るメスの機体、メッサーラ。モビルスーツ、とは言えない形。それはメイオウの前に来ると変形し、ヒト型となる。そしてビームソードを出し、斬りかかる。

メイオウは手より光の剣を出し、それを受け止める。そこにサラの援護射撃が襲いかかる。バリアーによってそれは防がれる。

「なんて性能?!」

サラが驚く。

「でも、負けない・・・」

メスが小さい声で言う。それをサラもバイファーンも聞いた。
「そのとおりだな・・行くぞ、サラ！避けろよ！」
パラス・アテネの盾にエネルギーが集束する。その盾は防御用ではない。攻撃のための武器なのだ。
「喰らえ、ゴッドハンマー！！」
神の雷のごとく、それはメイオウに向かって行った。

## 8

神の鉄槌のごときそれを、メイオウはただ黙ってみている。それを見てほくそ笑むバイファーン。
「・・・ぬるいな・・・」
「え・・・」
呟くアムロ。何とも知れぬ感覚を、メスが覚える。
「バイファーン、逃げて・・・・！」
か細い声を振り絞って彼女は言った。
「メス、ダイジョブよ」
「そうだぜ、メス」
二人が言う。雷が直撃する。
「ほら、な・・・・！??」
バイファーンの機体がバランスを崩す。駆け寄るサラの機体もまた、見えない力で倒される。
「なんで?!」
コントロールが利かないのだ。メスはしっかりと操縦桿を握り、それのいた方向を見据える。
「まさかな、直撃のはずだ…・」
操縦桿を握りしめ体勢を立て直すバイファーン。サラも立て直す。三人が未だ煙を上げている空間をにらむ。
煙が消えていく。そこから出てきたのは、黒光りする悪魔であった。
「無傷!?」
「そんな・・・」
「・・・・・・」
パラス・アテネが盾のチャージに入る。最大出力までためなければ、勝てないと判断したからだ。通常ならば、半分の出力で落とせる筈なのだ。それを敵は耐えた。

「・・・二人とも・・・コ・サイ・システム、使う・・・」
メスが呟く。驚く二人。
「メス、まだ無理よ！」
「そうだ、お前の精神がヘタすりゃ・・・」
「・・・大丈夫・・・信じて」
そう言って目を閉じるメス。メッサーラが発光し出す。
黒い悪魔、メイオウが動き出す。メッサーラを狙っていた。
「させるか！」
最大チャージではないが盾よりゴッドハンマーが放たれる。
「私も、本気の攻撃よ！」
ボリノーク・サマーンの持つ盾に着いていたクロー。それがブラックメイオウに向かって放たれる。
クローを避けるブラックメイオウ。それを見て口元を歪めるサラ。
「ふふ・・・」
クローが向きを変え襲ってくる。メイオウが再び避けようとするがそこに、ゴッドハンマーが迫ってきていた。
「まだまだぁ！！」
持っていたライフルより攻撃するパラス・アテネ。ボリノーク・サマーンも援護射撃をする。

「・・・くぁ・・・！」
一方、メスはもがいていた。小さな体を震わせる。このシステムは未完成である。システム自体もそうだが、パイロットも未熟だからだ。脳波コントロール。一年戦争時のジオンの技術の改良型。メッサーラにはそれが組み込まれている。
「ぁ・・・あああ・・・・」
飲み込まれそうになる。しかし、耐える。
（私には、この戦争が正しいかは分からない）
ずっと、木星圏で暮らしてきた。ずっと、実験の材料にされてきた。そんな彼女を受け入れてくれた二人の親友の姿。

（私は・・・守りたい・・・）
メッサーラが光に包まれる。そして何かがそこから射出される。エネルギー弾が何十も放たれる。

クローを粉砕し、攻撃全てを防ぎきったメイオウ。その前に、バイファーンもサラも手も足も出なかった。その間、メイオウは攻撃をしない。
「なめているのか・・・」
そう思ってしまうバイファーン。余裕そうに攻撃を防ぐだけ。
そのメイオウが腕を掲げる。二機に攻撃が降りかかる。同時に、しかも脈絡なしの攻撃。どうやったのかもわからない。
「ごめん・・・待たせて・・・」
二人がその声を聞いた瞬間、無数の光がメイオウに向かって言った。それはそれぞれ爆発し、それが連鎖していく。
「やったのね、メス！」
「取り敢えずは・・・でも」
攻撃が止む。三人が見ると、そこには傷ついたメイオウ。
「あの、サイコ兵器まで防ぐのか・・・！？」
サイコ兵器。シロッコが創り出した、パイロットの精神と、空間に作用する兵器のことである。空間自体を湾曲させ、バリアーなどは破る。それをいくつも浴びて、なお立っている。恐怖を覚える。
「やっぱり、無理なの？」
サラが言うのを、首を振って否定するメス。
「いえ・・・精神へのダメージ・・・・・・それは、効いているはず」
頭を押さえるメス。メイオウのパイロットの苦しみが、メスの脳に響く。このシステムの問題点は全方向に回線が開いてしまっている、ということだ。
「・・・・・・」
メスは目を閉じる。そこには、何かの空間があった。思念の集ま

る場所。そこに彼女と、もう一人、誰かが居た。
『あなた・・・誰』
それはもがきながら言った。
『アムロ・レイ・・・』
『・・・！』
咄嗟に彼女は眼を開ける。そこには先の空間はなく、コクピット内部であった。メスはメイオウを見る。
「二人とも…撤退・・・」
「！！」
「でも、メス・・・」
「・・・・・あれには、勝てない・・・」
「クソ！」
バイファーンがさも口惜しそうに言った。そして忌々しげにメイオウを見た。
「ガンダムめ・・・」
三機が撤退していく。その時でさえ、メイオウはもがき苦しんでいた。

アムロ・レイはメイオウの中に居た。そこで彼は発狂したかのように笑い続けていた。まともな精神ではガンダムは動かせない。それを、彼はよく知っていた。
（これは、破壊するべきだ・・・）
故に、彼は壊した。いや、壊したはずであった。
「シロッコ・・・このまま放っておくまいな・・・」
どんな形であれ、メイオウは消えなければならない。そう、この世界を守るためには。
「安心しろ、メイオウ。俺も一緒に死んでやる。だから・・・」
そう言って疲れたように目を閉じた。

## 9

こうやって見ると、何やら名残惜しく感じる。カミーユは戦艦アーガマの中より、自身のいたコロニーの跡を見る。ミラーが壊れ、あちこちに穴があいている。これでは到底人は住めない。

そんなカミーユのもとにフォウがやってきた。

「さみしい？」

「さぁね・・・でも、妙な感じさ・・・」

「そう・・・」

コロニーの住民たちは連邦の輸送艦で別のコロニーへと送られていく。

「それで、僕たちはこれから何処に行くんだ？」

「月の部隊と合流後、木星帝国の先遣部隊が奪ったコロニー、ムンゾを奪還するわ」

「ムンゾ？・・・・・・そうか、資源惑星とくっついているからか」

「そうよ。あそこから取れる鉱石で、カラバのモビルスーツはできている」

「・・・ガンダムは？」

「そこまでは私は知らないわ」

「そうか」

カミーユがドッグへ見に行くと、Ｚはに分割された状態で置いていた。

「アストナージさん！」

見知ったメカニックに声をかける。無精ひげをこさえた、若い男だった。アストナージ・メドッソ。カラバの兵器主任だ。

「何だい、カミーユくん」

「あの、Ｚ変わりましたか？」

一見して分割時の外装が変わっていたことを言ったのだ。あぁ、と納得してアストナージが口を開く。
「いや、なに。合体できないような外見に偽装したのさ。ちなみに名称はＺマシンだ」
「Ｚマシン・・・何かに発音似てません？」
「さぁ、気のせいだろ？」
「何か、他に変わったことは？」
「取り外し可能のビームガンを二機共に取り付けれる。合体時には外す必要があるが」
「なるほど」
そこでアストナージがため息をつく。
「？何か・・・」
「いや、Ｚはいいんだが、あれがね」
そう指差したのは漆黒のガンダム、ブラックメイオウ。
「アムロ大尉の機体ですよね」
「そうだ。外装はまだいいんだが、内部のＯＳが壊れててな・・・しばらくは使えんな」
そこにアムロが来る。アストナージの方にまっすぐ来る。
「すまないな、アストナージ」
「いえ、仕方ありませんよ。それで、代わりの機体ですが・・・これです」
ファイルを取り出し、アムロに渡す。それを横から覗き込むカミーユ。
「これは？」
カミーユが聞く。
「Ｚ，ガンマ、ブラックメイオウの量産試作機、さ」
「メタス、ディアス、ディジェ・・・か」
「はい、大尉にはディジェを使っていただきます。何分量産型ですから、攻撃力には限度がありますが・・・」
「まぁいい。乗りこなして見せるさ・・・おい、カミーユ。シュミ

レーたーで訓練するらしい、早く行け」
それが本来の目的であったらしい。カミーユはすぐにそっちの方へと向かった。

アーガマの艦長、ヘンケン・ベッケナー中佐は、クワトロと話していた。階級は彼の方が上だが、彼らは数年来の友人であった。
「それで、戦力は足りるだろうか？」
クワトロが聞く。渋い顔をして、顎鬚をなでるヘンケン。
「月でも増援は増えているが、ちときついだろう」
「そうか・・・・それより、結婚したそうだな。おめでとう」
「いや、なに。戦争で死ぬ前に攻めて、思いを伝えておこうって決心したらな、彼女、ＯＫしてくれてな。急だったが、結婚したってわけなんだ」
恥ずかしそうに言う偏見。外見こそ厳ついが、この男は人情味あふれる男である。
「奥さんは？」
「月の合流部隊に居るよ。彼女もパイロットだ。お互い信念があってやっているしな…」
「名前は？」
「エマ・シーン」
「あぁ、彼女か。・・・大切にしてやれ」
「言われずともな」
そう言って笑う。
「それより、これで無事月までいけると思うか？」
ヘンケンが聞くのを、首を振って否定するクワトロ。
「無理だろう。木星軍も続々来ているのだ。我らを見過ごすわけがない」
「何隻か来る、ということか」
「臨戦態勢は常時取っておかねばならないな」

「こちらの出せる戦力は？」
「ガンマとＺ、それにネィモ四機だ」
「きついな…ブラックメイオウは？」
「ＯＳに駆動系、サイコパラメーター・・・どれも深刻なダメージだ。どうやらサイコ兵器は着々と出来上がっていっるらしい」
「急がねばな」
「あぁ、でなければ世界は最後の日を迎える。ジュピターガンダムによってな」
「それだけは防がなければならん。そのためのカラバであり、ガンダムなのだ」
渋い顔のヘンケン。クワトロもまた、顔をしかめていた。

# 10

木星圏より迫っている大艦隊。それは木星帝国の主力艦隊である。ジュピトリスをはじめとする、ヘリウム輸送艦。そして、それを護衛するドゴス・ギア級。その数合計３０００隻。先遣部隊はおよそ１５００隻であることを考えると、この数は圧倒的である。現在地球連邦の所有する艦は３４００隻。うち輸送艦は１０００、残りは駆逐艦や主力艦である。と、言っても、そのほとんどが前大戦時のものであり、最新式の木星帝国には、全ての面で劣っていた。

それだけではない。モビルスーツや、プチモビル。それらの量産に関しても彼らの方が優れていた。既にこの戦争は木星側に有利なものとなっていた。

「フフ、この調子なら私が出るまでもないな」

シロッコがブリッジに佇む。不敵に笑うその若き指導者。

「ハマーン様も、事態が速く進むことに喜ばれていよう」

「シロッコ様」

「ん。なんだ」

「お呼びになっていた三名が来ました」

「わかった」

シロッコはブリッジを出る。そして自身の執務室へと入る。

しばらくして、三人が入ってくる。敬礼し、シロッコの前に並ぶ。それを前のソファーに座らせる。

「バイファーン、サラ、メナッサ、ご苦労であった」

「は・・・」

シロッコがそう言ったのを、頭を下げて返す三人。

「集まってもらったのは他でもない。・・・ガンダム、だ」

「・・・・・・」

沈黙する三人。

「君らを責めるわけではない。ガンダムはその性能ゆえに並みのものでは勝てない」
「・・・三機、確認できました」
バイファーンが言う。
「赤いタイプと、細身のタイプ。それに・・・」
間をおくバイファーン。
「かつてのガンダムをそのまま甦らせたようなガンダムです」
「ほぅ・・・」
顎に手を抑えるシロッコ。
「連中はそこまで、作っていたか。・・・・・」
立ち上がるシロッコ。
「三人とも着いてきたまえ」
歩きだす若き指揮官について行く三人。ジュピトリスの最奥部へと向かうエレベーターへ乗り込む。
「・・・あの、シロッコ様。どこに・・・」
「このジュピトリス。何故、こんなヘリウム輸送艦が旗艦であるのだと思う？」
「は？」
ジュピトリスは超大型艦だが、武装はほとんどない。それにもかかわらず、何故旗艦なのか。そのようなことを三人は、いや、他の者も考えなかったろう。
「フフフ、これはただの舟ではないのだよ」
エレベーターが止まる。降りると、その先には光が満ち溢れている。
「何の光？」
「粒子・・・？」
唖然とする三人。
「これを運ぶための箱舟、ということだ。これはガンダリウム線だ」
「ガンダリウム線？」
「そう、これこそが、私が発見したものでね。ただのエネルギーで

はない。物質化し装甲にも、武器にもなる。謎の、エネルギー。私をもってしても、その全貌を明かすことはできなかった」
両腕を大きく広げ、苦々しい表情のシロッコ。自分にわからないことがあるのを、彼は悔しいのであろう。
「これから見せるのは、それを利用して作りだしたモビルスーツ。ガンダリウムの恩恵を最大限に生かし作り上げた、私の最高傑作だ。それを君たちに乗ってもらう」
「テストパイロット、ということですか？」
バイファーンが聞くと、頷くシロッコ。
「そう。さぁ、来給え」
光へと歩くシロッコ。それに恐る恐るついて行く三人。その先に待つ、三体の機体。
「これは・・・」
「ジオン第十三番目の機体、ガンダム。それを私は独自に開発した。そして、さらにそれを強化・発展させた。ジュピトバイアラン、ジュピトギャプラン、ジュピトバウンド・・・この三機が合体することで完成する最強のモビルスーツ。その名は、ジュピターガンダム！」
「ジュピター、ガンダム・・・？」
「そう、新たなる秩序をもたらすための、最後の使者にして、真のガンダム。全ては、この時のためにあったのだ！！」
シロッコの瞳が光る。その奥には野望の光が宿っていた。

# 11

月への行路を取っていたアーガマ。その中でカミーユとアムロはシュミレーター、実機訓練などに明け暮れていた。はっきり言って二人とも並みのパイロットより優れてはいた。だが、それだけでガンダムが扱える、というわけではなかった。アムロは月から一足先に贈られたディジェに乗っていた。水色と青のカラーリング、そしてモノアイタイプの頭部など細部は違うものの、それはメイオウガンダムと変わらなかった。

「とはいえ、俺の反応に機体が追いつかないな」

量産型では仕方がないことである。そもそも、アムロのようなものの方が特殊なのだから。

一方のカミーユは自分の手足のようにZを操っていた。今ではフォウのアシストさえ必要ないまでに、だ。

「おい、カミーユ。調子に乗るなよ！」

「大丈夫ですよ、アポリーさん」

ディアスに乗る先輩パイロットに言うカミーユ。Zの後ろには黒いディアスと赤いディアスが居た。黒い方はロベルト、赤い方にアポリーが乗る。アムロのディジェと共に一足早く配備された二期はこの二人のベテランに渡されていた。どちらもクワトロの知己であるらしく、個人的に信頼を寄せられていた。

「ん、何だあれは」

ロベルトが言った。ロベルトの機体は索敵用の電子機械が頭部に接続されていた。そのため、若干不格好ではあった。

「どうやら、連邦の艦がやられているらしい。アポリー、カミーユ！救援に行くぞ！」

「え、アーガマに報告は？」

「今やった。アーガマにはクワトロどのがいる。我々は友軍の手助けに行く」

ロベルトが言うと、黒いディアスが光の方向へ行く。アポリーは肩をすくめて言った。
「相変わらず熱い漢だな。ま、それがあいつのいいところではあるが」
そう言ってアポリーの機体も続く。
「ちっっ」
舌打ちしてカミーユもそれに続く。

木星軍に襲われていたのは三隻の戦艦であった。相手は一隻のみ。しかし、大量のモビルスーツがその艦には搭載されていたのだ。
木星帝国軍主力艦ドゴス・ギア級チャリオット艦長のガディ・キンゼー中佐は配下の部隊に命じた。
「全部隊出撃」
静かに中佐は言ってリニアシートに腰を沈めた。
「三人につなげてくれ」
回線がつながる。三人のパイっロットの顔が映される。
「中佐。我々に出撃は？」
その男、バイファーンが尋ねる。それに対し、腕を組んでおもむろに口を開くキンゼー中佐。
「戦いに勝つためには、機というものを見ることができなければならん。機、をな」
「と申しますと？」
「何故、我々がこうしているのかを考えたまえ」
「・・・・・・アーガマ、おびき寄せる・・・」
メスが言う。
「そうだ。アーガマは来るだろう。艦自体が来るか、底のモビルスーツ部隊が来るか…どちらにせよ、その時に君らに出てもらう。ジュピトシリーズ、ジュピターガンダム。その力を試すにも、不足の相手ではなかろう」
そう言って笑うキンゼー。３０代半ばの男の顔を見る三人。

（・・・・・さすがに、優秀ね・・・・・）
メスはそう思った。中佐であるにもかかわらず、シロッコの信頼も厚い。でなければ、このような貴重な機体を預けることもなかったろう。
「艦長」
オペレーターの一人がキンゼーに声をかけた。
「アーガマのモビルスーツ三機来ました」
「ん。では、出てもらうぞ。健闘を祈る」
敬礼するキンゼーを、モニターに見ながら、三人は宇宙に飛び出た。バイアランにはバイファーン、バウンドにはサラ、ギャプランにはメスがそれぞれ搭乗していた。
「チェンジ！」
サラの機体バウンドが変形する。いびつな人型であったそれは脚部が蟹の鋏のように変形し、胴体は大きなスカートに隠れた。バウンドドッグ形態に変形した。
「ロングレンジキャノン照準合わせ・・・目標ロック！行けるわ、バイファーン」
バイファーンのバイアランが寄って、バウンドドッグの側面に展開されたバスターキャノンを構える。
「喰らえ、ガンダム！！」
一筋の閃光が走って行った。それはカミーユのZに向かっていく。
カミーユは激戦の中に向かうそのとき、何かを感じ咄嗟に操縦桿を切る。Zが動いたそこへビームが通り過ぎる。
「何！？」
「長距離狙撃か！」
アポリー、ロベルトの機も動きを悟られぬように大きく動いた。
「逃すかよ！」
バイアランがバウンドドッグより離れ、一気にZに迫る。
「こいつ、早い！！」
「凄い！ガンダムに後れを取らないぞ！」

バイアランがビームソードで斬りかかる。
「させるかぁ！」
ロベルトのディアスがバズーカを構え打つ。アポリーも数句刻遅れて構える。
「・・・・・・させない」
ギャプランが二機を牽制するためにビームキャノンを打つ。変形して人型になってロベルト機の後ろに回る。
「クソをぉ！」
カミーユはバイアランを払いのける。腕がせり上がり、そこからビーム状の刃が出る。
「ビームカッター！！」
ギャプランはそれを避ける。バウンドがキャノンを打ってくる。それを腕を顔面の前に構え、ガードするZ。
「ぐあぁ！」
「ロベルトさん！」
ロベルトの機体はバイアランに押されていた。アポリーが加勢しているが、バイアランは苦も無く避けていた。
「くそぅ、何なんだこいつらは・・・」
下で乾燥している唇を舐めるカミーユ。Zが動きを止める。
「・・・・・・取った・・・」
「貰ったぁ！」
バウンド、ギャプランが接近する。
「マズルフラッシュ！！」
Zが発光し、光が満ちる。ギャプラン、バウンド、バイアラン…戦場の全ての機体が動きを止める。
「目くらまし・・・・ではない？！」
驚くバイファーン。
「閃光は目くらましではなく、システムを一時的に麻痺させるため、だ・・・・Zの脳波連動システム・・・」
カミーユはめまいを感じた。

「まだ、完全では・・・・・」
三機のジュピトシリーズは体制を立て直す。
「不意を喰らったが、次はそうはいかん。これで決める！」
バイファーンが勢いづく。
「合体だ、サラ、メス！」
「了解」「・・・・了解」
光り出す三機のジュピトシリーズ。
「何だ、このプレッシャー・・・？」
カミーユは肌で何か、そう、言い表せぬ何かを感じていた。アポリーも呆気にとられるなか、ロベルトは突撃していった。
「何をするかは知らんが、その前に叩き潰してくれるーーーーー！！！」
「待って、ロベルトさん！」
カミーユが叫ぶ。
（行ってはいけない。それは・・・それは・・・・！！）
光が膨れ上がり、一つの形になっていく。
「うおおおぉぉーーーー！！！」
突進するディアスが、光に向かって剣を振り下ろす。しかし、剣は宙を切っただけであった。
「何ぃ？！！」
「ロベルトさん、上・・・・」
そうカミーユが言おうとした瞬間、そのディアスは切られていた。
機体がぱっくりと、左右に分かれた後、爆発した。
「ロベルトォォーーーーー！！」
アポリーが泣き叫ぶ。カミーユも、目頭を押さえる。そして、キッと上を見上げた。
そこには、巨大な悪魔が立っていた。
「・・・・！！」
それの顔は、明らかにガンダムのそれであった。

## 12

「ガン、ダム・・・？」
カミーユは巨大なそれを見上げながら、呟いた。全長およそ70メートル。外見こそ違えど、確かにそれはガンダムであった。
『聞こえるか、ガンダムのパイロットよ』
響く声。それは巨大なガンダムのものからだというのが分かった。
『諦めろ、我々木星の民が新世界の支配者となるのだ。無駄な抵抗はよせ』
「俺に、指図するな・・・」
小さくカミーユはそう呟く。そして、ビームカッターを放つ。それは群れをなしてそのガンダムに向かっていく。
『無駄だ』
腕を振るい、いともたやすくそれを防ぎ、全身からビームが放たれる。全方位・・・自分以外を殲滅する悪魔の光。
カミーユはそれを何とか回避する。Zと、彼の操縦センスが無ければ難しいことだった。現にアポリーの機体は無数のビームに貫かれ、爆散していたし、周りの敵味方問わず殲滅されていた。
「アポリーさん！」
カミーユはそれを睨む。巨大な敵を前にしながらも、彼は闘志をみなぎらせていた。
『無駄だ、このジュピターガンダムの前にはなぁぁ！！』
ジュピターガンダムが両腕を出すと、またもや無数のビームがZを襲う。それを避けるカミーユ。しかし、その攻撃は先ほどよりも、数、スピードともに強化されていた。
「Zが、負ける・・・？」
『はっはあぁ！死ね、ガンダム！』
ビームを納めると、次に二本の大剣を出し、Zに振り下ろした。その軌道を、読むことは敵わない。

（死ぬ！？こんなところで・・・・・・）
実感できぬまま、死は迫ってくる。
（まだだ・・・まだ・・・Ｚ！！）
念じるように、Ｚに意識を集中する。
（出来る筈だ…これも、ガンダムならば・・・）
人智を超えた力。それはガンダムの代名詞でもある。
（Ｚ！！！）
世界が光に包まれる。

（・・・・・・ここは・・・？）
広がる宇宙にさまようカミーユの体。無限に広がる世界と無数の輝く星の海。彼はその中に居た。
（いったい・・・？）
『辞めて・・・私の中に、こないで・・・・！！』
（えっ！？）
響き渡る声。それは少女の声であった。その声を探すようにカミーユは見渡す。
（どこだ・・・どこにいるんだ・・・）
『お願いだから、私に・・・触らないで・・・・・・・・！！！』
強い拒絶の方向には、巨大な体がたたずんでいた。悪魔のごとき、ジュピターガンダム。
（あの、中から・・・？）
カミーユはその方向に手を伸ばす。途端に、身体が押し戻される。そうして現実へと彼の精神は戻っていく。

（！？何だ今のは・・・・）
気を取り戻すカミーユだが、目前に死は迫っていた。
「Ｚ！！」
Ｚはカミーユの意思に従い、剣を出し、その大剣を受け止める。
『なんだと！！』

「くぅ・・・・っっ！」
そしてはじき返す。ジュピターガンダムが姿勢を崩す。
『何処に、こんなパワーが・・・ガンダリウム線を超える力・・・・・・・？』
「Ｚには、人の思いを反映させる力があるのか？」
カミーユはそう呟き、前を見据える。
「ならば、負けない。負けるものかよ――――ぉ！！」
切りかかるカミーユ。ジュピターガンダムが押されていく。
『まさか、ジュピターガンダムが・・・！』
『バイファーン、メスの精神に負担が・・・』
『何、メス、無事か・・・！』
『・・・・・・・・・・』
『くぅ、このままでは・・・・』
唇をかむバイファーン。なおも続く猛攻に防御するしかなかった。
『・・・・・。分離するぞ、サラ！メスを連れて離脱する！』
『わかったわ』
離脱しようとする意識を感じ、カミーユは駆けた。
「逃がすものかぁ！」
『っ！分離！』
分離した三機。うちのギャプランは隙だらけであった。そのギャプランを捕まえようと、バウンド、バイアランが手を伸ばすが、Ｚによって、その腕は断ち切られる。
『く、メス・・・！！』
『サラ、離脱だ・・・・』
『でも・・・・』
『三機を同時に失うことは許されん。行くぞ！！』
『・・・了解』
翻して去る二機。カミーユはそれを追いかけようとして止めた。
微弱だが、何かが、彼の脳裏でささやいていた。
『・・・やめて・・・やめて・・・・！』

それは、あの世界で聞いた少女の声であった。
宇宙で停止するギャプランを捕まえるZ。そのZの中からカミーユはあたりを見た。残骸と戦いの跡だけが残っていた。味方も敵も、二機を残して生存してはいない。はるか向こうで一つの光が去っていくのが見えた。
（敵の、母艦、か・・・）
そう思い、ギャプランを見るカミーユ。
「置いて行かれてしまったのだな・・・」
先ほどまでの敵意は自然と消えていた。穏やかな目で、彼はギャプランを見ていた。

「ふむ、やはり、あれにもまだ問題はあるな・・・」
目を閉じていたシロッコが呟く。暗い室内。何もないはずの空間で彼はひとり呟いた。
「ガンダリウム線の増幅装置の問題か、パイロットの質のせいか・・・・・まぁいい。真のジュピターガンダムの誕生…それがなされれば、奴らの作りだした仮初のガンダムなど・・・・」
そう言って立ち上がる。その瞬間、光が満ちる。それはガンダリウム線の光であった。
「お前もそう思うか・・・・ジュピターよ・・・！」
シロッコは嗤った。

## 13

バイファーン、サラはキンゼーに叱りを受けていた。
「貴様らは貴重な戦力を無くしたのだぞ、全く。味方も巻き込むとはな・・・」
「申し訳ありません、中佐」
頭を下げるバイファーンとサラ。それを見て手を振るキンゼー。
「まぁいい。貴様らの失態の尻拭いのために、新たな補充員が来る」
「補充、ですか？」
「そうだ。ガルバルド？（ツヴァイ）のライラ・ミラ・ライラ大尉だ」
「あの、ライラ大尉ですか・・・」
木星帝国にいるエースパイロットたち。その中でも腕利きの「皆殺し」のヤザン、「閃光」のロザミア、「剃刀」のブランと並ぶエース、それが「赤色」のライラである。「赤色」とは、彼女の搭乗機が紅の機体であるからだ。
「まさか、あの人が・・・・」
「他に量産型ガルバルド、バーザムを数機補充する。補充後はハリオとの連携で、アーガマを責める。シロッコ様には私から言っておく。両名下がって良し」
「はっ」
敬礼し、二人が去ると、キンゼーは軍帽を取る。
「これもあなたの計画通り、ということですかな」
モニターに問いかける。そこにはシロッコが映っていた。
「全ては人類全体のため、だよキンゼー中佐」
「あなたが、木星の果てに何を見たかは知りませんが、あなたを信じましょう」

「ありがとう中佐。ならば、私もその信頼に応えよう」
「では、教えていただきたい。ジュピターガンダム・・・あれが、我々の未来をもたらすものではありませんね」
「フフフ…あれは、そのための試作機にすぎないよ。飽くまでね・・・。本物を、彼らに任せるわけにはいかない。なにせ、モノがモノだからね」
「しかし、いいのですかな。アーガマとそのバッグに居るカラバ。そして、ガンダム・・・」
「彼らに真のガンダムは作れない。そもそも、ガンダムは私が作ったもの…オリジナルには決してかなうことはおはない」
「私は一抹の不安を感じられずにはいられぬのですが・・・」
「杞憂だよ。わたしは、天才なのだ。私は負けんよ。時は私に味方している」
「・・・・・・・」

ガルバルド?を先頭とした補充部隊はアーガマを捕捉していた。紅の機体で構成されたこの部隊はライラ・ミラ・ライラが見込み、たたき上げた者たちでなる部隊である。
「フン、いたなアーガマ。手土産の一つや二つ、いただくとしようか・・・。マシュマー、キャラ、グレミー・・・側面に回れ。後は私についてこい。本気は出すな、モビルスーツは撃墜するな、コクピットを貫いて持ち帰るぞ。ついでに奪われたのも奪い返すぞ」
ライラの駆るガルバルド?がアーガマに向かっていく。

「えぇい、敵襲か！」
『ヘンケン艦長、俺が出る』
アムロがコクピットから言った。
「しかし、君一人では・・・」

『カミーユを休ませる必要がある。あのモビルスーツのこともある。戦力をそう裂くわけにもいかん』
「ううむ、わかった」
『ディジェ、アムロ、出る！』
　宇宙空間に水色と濃い青で構成されたディジェが飛び出た。頭部はモノアイタイプであったが、外見はメイオウガンダムに酷似していた。それはいい気に加速して敵に迫った。背部から、長い柄を取り出し、その両端から光の刃が出る。それを一振りし、近くにいたバーザムを両断する。
「チィ、あいつ、腕利きか・・・！」
ライラが舌打ちする。
「あたしが引きつける。お前らは戦艦を相手しろ」
　そう言って、ディジェに近寄る。ディジェはナギナタを振り下ろし、近づく紅を切った。
「何、残像！？」
「甘いんだよ・・・」
　上からビームの雨を降らせる。ビームシールドでガードするアムロ。
「舐めた真似を・・・」
　右腕より、エネルギー砲を打ち、ライラ機に直撃させる。しかしガルバルド？のシールドがそれを防いだ。
「シールドが一撃で・・・？」
「はぁあ！」
　一気に懐に飛び込むディジェはナギナタを振り下ろす。二本のビームソードを取り出して、それを受け止めるライラ。
　ディジェのモノアイが光る。そこからレーザーが出てくる。
（このままでは、頭部に・・・！）
ライラは咄嗟にガルバルド？の頭を動かす。だが、その隙に、アムロはディジェで体当たりをし、相手のバランスを崩すことに成功する。

「しまったぁ！」
「貰った！！」
だが、ディジェの攻撃は当たらなかった。
「くそ・・・」
「・・・なぁんて当たってやるものかよ！」
ガルバルドは難なく避けてビームソードでナギナタの柄を切り裂いた。
「得物はないぞ、ガンダムもどきめ！！」
（くそ、ディジェの反応が俺に付いてこない！？）
アムロはディジェの動きが自分に付いてこないことにいら立った。所詮は量産型。彼の動きについては来られない。ガンダムならば、着いてこれるというのに。歯がゆい思いのアムロであった。

一方、アーガマはビームフィールドを展開し、敵の猛攻を防いでいた。
「艦長、フィールド、あと三分できれます！」
「くぅ・・・クワトロは？」
「ハッチに居ます」
「出撃準備はできているな…仕方がない、出てもらう」
『了解だ。艦長』
クワトロが応じた。
「よし、カタパルトのフィールドを解け、クワトロ機を出すぞ」
「了解」
アーガマのカタパルト上のフィールドが一部解ける。そこからクワトロの真っ赤な機体が出てくる。
「相手も赤い機体か。好都合だな」
ガンマガンダムを駆ってクワトロが呟く。その前に三機のガルバルドが立ちふさがる。
「ム・・・」
三機の背部に積まれたミサイルコンテナより、何百ものミサイル

が放たれる。それをクワトロは回避する。
（システム補正が無ければ、やられているな・・・）
回避しながらもバルカンでミサイルを落とす。そんなクワトロのガンマガンダムにビーム攻撃を浴びせる、三機のガルバルド。
「その程度、ガンダムには敵わぬ！」
両手が光り出すガンマガンダム。
「サイコエナジーチャージ・・・・・・！」
エネルギーが集まる。そのエネルギーの余波でビームが弾かれる。
「はあぁぁぁぁぁぁ！！オーラウェポン！！」
ガンマガンダムの両手から無数の光の矢が放たれる。それらは三機のガルバルドと、その他の機体を攻撃する。ガルバルド達は回避するもダメージを追って行った。
「くそ、撤退する！」
このままではやられる、そう感じ、紅の部隊は撤退していった。
「ふむ。まだ、改良の余地があるな・・・」
クワトロが呟いた。

ライラは味方の撤退するのを見て、ガンダムから離れた。
「くっそ！あと一歩というところで・・・」
悔しそうに顔ゆがめたライラは、急速に戦場を離脱した。
アムロは苦々しくそれを見ていた。
（ガンダムさえあれば、俺は…）
あれほど憎んでいたガンダム。しかし、あれでなければ彼の実力を発揮できない。そのことを歯がゆく、そして複雑に感じながら、アムロはアーガマへと帰還していく。

# 14

アーガマの医務室に少女が一人いた。まだ、成人はしていない、よくて14、5歳であろう。彼女はあのギャプランの中から収容された木星帝国の捕虜であった。
「こんな子供まで・・・」
カミーユが言った。その隣にはフォウがいた。
「珍しいことではないよ。戦場に生きる子供なんてね・・・・」
フォウがそう言って少女の髪をなでる。含みを持ったその言い方に、カミーユは首をかしげた。
「フォウ、君は・・・・」
「私もこの子と一緒よ…そう、いっしょなのよ・・・・」
少女の頭が動く。フォウが撫でるのをやめ、少女を見る。
「目が覚めた?」
「・・・・・・・」
ゆっくりと瞼を開く少女。そして、フォウと、カミーユを見ると、驚愕に目を見開いた。
「・・・・・?!!」
「安心して。何もしない」
そう言って少し離れるフォウ。カミーユは特に何もしない。ただ、黙っていた。
「私はフォウ・ムラサメ。あなたは・・・?」
穏やかな声。若干の警戒を抱きながらも、少女は一言告げた。
「・・・・メナッサ・ウェイ・・・・」
「そう・・・・いい名前ね・・・」
フォウがそう言って近づく。カミーユはなんとなく、疎外感を感じた。
「俺、報告してくるよ」
そう言ってカミーユは去った。

「あの声…」
「どうしたの？」
「あの声は・・・・敵・・・・」
「彼はカミーユ・ビダンっていうのよ」
「・・・・・・・」
呆然とフォウを見るメス。
「・・・・・あなたは、何・・・・・？」
「・・・私はねメナッサ、あなたと同じ存在。ただ一つの目的のためだけにある・・・」
「・・・・・・！！」
「でも、心配しないで。私が居る限り、あなたは私が守ってあげる」
そう言って抱き締める。さながらそれは、血の繋がった姉妹のようであった。メスの肩から力が抜けた。

「そうか、起きたか・・・」
ギャプランを見ながら、クワトロが呟いた。
「本当にあの子がこれを動かしていたのでしょうか？」
「連れてきたのは君だろう、カミーユ」
「そうですが・・・・」
クワトロがサングラスを外す。
「子どもといえど、戦争の道具となるのだよ。戦争とは、そういうものだ・・・・」
「でも、正義ってものがあるでしょう？」
カミーユが言った。それを横に居たアムロが鼻で笑う。
「優秀でも、言うことが青いな・・・カミーユ」
「・・・アムロさん」
「正義なんてものはな、人の数だけある。殺すことが正義、なんてやつも居る」
「・・・・・・・」

「俺たちは神じゃない。本当に正しいことを行うことはできない。・・・もっとも、神になろうとしたから、ガンダムなんてものができたんだろうがな」
そう言って頭上のブラックメイオウを見る。未だに修理作業ははかどっていないようだ。
「そう、人は神にはなれないのにな…」
どこかに、哀愁を感じるその顔に何も言い返すことのできないカミーユであった。

「フォウ、少しいいかね？」
「・・・クワトロさん」
クワトロとカミーユが医務室に入ってくる。それを咎めるような目つきで見るフォウ。
「駄目です。まだ・・・・」
「それは君の決めることではない。同情しているのだろう、同じ境遇だと・・・」
「・・・・・・」
「しかし、ことは一刻を争う。世界の終末がかかっているのだ。その前に個人の感情など・・・」
「クワトロさん、言い過ぎですよ！」
カミーユがクワトロに言う。カミーユに顔を向けるクワトロ。
「君も覚えておくことだ。個人の意志など、無に等しい、とな」
自分に言い聞かせるようにクワトロは言った。それは彼自身への戒めでもあるのだ。
「では、聞くとしよう。メナッサ・ウェイ。いや、個体ナンバー０９９」
「・・・！！！」
目を見開き、震えだすメス。
「ジュピターガンダムはどこまでできている？」

「・・・・嫌・・・・・・・・」
「シロッコの計画はどこまで進んでいる？」
「・・・いや、いや・・・・・・・・・・」
「答えろ、奴はどこまで・・・・・・！！！」
声が荒くなるクワトロを、メスから引き離すカミーユ。
「クワトロさん！！」
「奴は、シロッコは・・・断罪しなければならない・・・！姉さんを、殺したように・・・・！私が、俺が・・・・僕が・・・奴を！！」
（狂っている・・・狂っている・・・・・）
そう思うだけのプレッシャー。それを感じるカミーユ。と同時に感情が流れこむ。

憎しみ、悲しみ、孤独、怒り・・・・。とめどもなくあふれる感情の波。
どこかの風景が現れる。咲き誇る花。見渡す限りの草原。そこに居たのは、小さな、あどけない、クワトロらしい金髪の少年であった。後ろには母・・・もしくは姉が微笑んで佇んでいる。そこが一瞬にして燃え上がる。女性の影が消え、独り少年が残される。
そしてそこに、ガンダムが現れた。

現実に引き戻されると、数人の医師が鎮静剤をクワトロに打っている。それによって、クワトロはぐったりと倒れた。メスはまだ震えており、それをフォウが抱きしめている。
（あそこにいたのは、ガンダムだった・・・。一体何なんだ、ガンダムとは・・・）
ただの兵器では無いことはわかる。だが、わからない。
「わからない、だろうな・・・。ガンダムが」

医務室を出ると、アムロが立っていた。
「教えてやるよ、あいつのトラウマと、俺の知りうる限りの情報をな」
そう言って歩く出すアムロを、カミーユは追って行った。

## 15

「俺がクワトロ・バジーナ…いや、ジオン・ズム・ダイクンと会ったのは、9年前の一年戦争の時だ…」

誰も居ない、アムロの部屋でカミーユに話し始めるアムロの第一声にカミーユが驚く。

「幼帝ジオン?!まさか、あの人が・・・」

「元は普通の一般市民でな、元の名はエドワウ・マスと言ってな。父、母、姉、妹・・・そんなごく普通の9歳の子供だった・・・。しかしギレンの目にとまり、一躍ジオン帝国初代皇帝、という地位にされた。理由は簡単だった。幼帝ならば操るのも簡単だったから、それだけだ。

俺は一時期ガンダムに乗り、独りさまよっていた期間があってな。その時月にいた。そこで奴に会った。俺と奴にかかわりなどない、筈であった。だが、あった。ガンダム。これが俺たちを引き合わせた。いや、最初からガンダムに縛られていたのだ」

アムロが一息つく。

「ガンダムはジオン帝国13番目のモビルスーツといわれるが、実際は違う。ジオンで作られたが、その基礎は木星圏地球連邦軍のパプテマス・シロッコの提案であった。木星エンジンもその一つであった。

ガンダム、はただの機械の塊ではない。ソレは意思を持っていた。

戦争末期、俺はガンダムで全てにけりをつけようとした。その俺に、エドワウの姉のセイラ・マスも付き合ってね。彼女は調整されたガンダムの生贄。全てが整ったときにガンダムを発動させ、世界を変える・・・それがギレンの計画だった。ま、それも彼女の死と、ギレンの帝国の崩壊で終わったが…。

エドワウは姉の死にショックを受けた。そして、ガンダムを憎悪した。なにせ、あれが無ければ、帝国も、姉の死も、全てが無かっ

たのだから、まぁ、当然だ。
　その後奴はシロッコの計画が終わっていないことを知り、シロッコへの、ガンダムへの復讐を抱いた・・・・。簡単に言うとこんなところだな」
「・・・・・・」
「奴にとって世界が滅びようとどうでもいいんだよ、本心では。だが、そんな自分に嫌悪感を抱いている。奴も、色々抱えているってことだ」
「・・・・アムロさんはどうなんですか？」
「俺、か。俺も、似たようなもんさ。ガンダムを潰す。それは俺の使命のようなものだ。ばかばかしいがな。９年前、ガンダムに会うことは定められていたことであった、一生逃れることはない、と死にざまにギレンは言っていた。
　ならば、正面から俺は戦ってやろう、と思った。がむしゃらに、な」
「・・・・僕には・・・・・」
　戦う理由はない。そう言おうとするカミーユの肩を叩くアムロ。
「今は戦う理由は無くてもいい。だが、いつまでもそれではいけない。でなければ、ガンダムに取り込まれるぞ」
「ガンダムって何なんですか？アムロさんは知っているんでしょう？」
「さぁな。あれは異質なものだ、としか言いようがない。かつて木星エンジンの中に入っていたもの。それが何なのかを知ることはかなわん。だがおそらく、人類がまだに見ぬ発見をシロッコはした、それだけだ」
「最後に、個体ナンバー０９９ってなんです？」
「やはり、聞いてきたな」
「それに、フォウも同じ境遇って・・・・」
「エドワウの姉、セイラは生贄だと言ったな」
「はい」

「生贄が居て初めてガンダムは動く。そう、パイロット一人ではない。コパイロットが必要なのだ、その真の力を引き出すには。シロッコとギレンによって遺伝子操作されたものたち。後天的に、少女たちは改造された。よりガンダムを引き出すために。その多くは木星帝国に居たが、ジオンの施設にも若干残っていた」
　そこで苦い顔をするアムロ。何か、触れたくない過去があるかのように。
「それがフォウだ。当時はまだ6，7歳・・・。カラバはそんな少女も利用している。これを知ってどう思う、カミーユ」
「信じられません。僕たちはシロッコと同じことをしているんですか？」
「そう。正義、なんてそんなものさ。いつの時代もな」
「それは大人のいいわけです」
「かもな」
「シロッコを倒しても、僕たちは、世界は戦わなくて済むんでしょうか？」
「人の業は深い。ガンダム。それが残る限り、平和など来ない」
　そうして、アムロの話は終わった。
　カミーユに残ったのは虚しさだけだった。
（結局、自分の都合で他人を振り回しているだけだ。大人は勝手だ・・・）
　大人、というものへの嫌悪感が湧いてくる。いや、元々あったものが再び表面に現れた、といった方が正しい。
（そうか、だからか・・・・・）
（だから俺は捨てられたんだ・・・・・）
　子供の頃から独りだった。親は帰ってはこなかった。その理由を始めてカミーユは気が付いた。
（・・・・・・・・・・）

# 16

月の都市フォン＝ブラウンに入港するアーガマ。本来、月は不干渉地帯であったのだが、前大戦後、地球連邦が秘密工場を作り、カラバへと流し渡された。現在、月ではディアス、メタス、ディジェの本格的な量産が行われている。月のプラントは、最新の技術で作られている。戦後急速に発展したアナハイムの力も加わっているのも大きい。

「それで、俺のガンダムはいつ動く？」

アムロが月の整備長に聞く。

「三日。それで直して見せよう」

「出来るのか」

中年の整備長が渋い顔をしてツナギの袖をまくる。

「出来る。フル動員でやる」

プロとしての意識があるのだろう、そういって彼はすぐに修理に取り掛かった。

（ジュピトギャプラン、か）

運ばれていく木星のモビルスーツを見る。これからアナハイム本社に届けられるのだろう。そこで木星の技術を奪う、というわけだ。

（そううまくいくかな・・・・ここまで奴らはそう焦って取り返そうとしてこなかった・・・・何かあるな・・・・）

シロッコに直接会いこそしないが、アムロは十分にシロッコを知っているつもりだ。

「・・・・・・」

いつでも出れる準備だけはしておこう、とアムロは思った。

フォウはメスにずっと付いており、艦に残っていた。カミーユはそのことに何も驚かない。いわば、二人は姉妹のようなものだ。そ

の境遇から何から。悲しいことだとは思うが、独りでないことは精神的に良いことだろう。
（そういや、ここか・・・・・）
アナハイム本社ビル。月のドームの中でひときわ大きく、目立って立つそれを眺めるカミーユ。
（親父と、お袋の勤め先……）
独り、には慣れた、そう、小さい頃から。資金的なつながりでしか、カミーユは親を感じられなかった。普通では無かったが、別段寂しく思ったことはない。
（どんな顔してたかも俺は知らない。たぶん、向こうも）
なのに、何故か、フォウとメスのあの、繋がりを見ると、胸に隙間風がしみる。他者との繋がり。それはその人の存在を意味する。
（俺に、そんなものがあるのかな）
他人を恐れ、逃げてきた。それが、カミーユの生き方だった。たった一人で生きてきた。だれにも頼らず、一人の力で。
アナハイム本社ビルに背を向け、歩き出すカミーユ。その背中に呼び止める声があった。
「お待ちになって」
咄嗟に誰が呼ばれたかは分からなかったカミーユはゆっくりと振り返る。するとそこには、長い金髪を揺らした、女が居た。
「俺のことか？」
確認すると、女は頷く。
「そう、あなたよ、カミーユ・ビダン君」
「俺の名前を・・・？」
「ええ、私は何でも知っているの。・・・少し、お話でもしましょうか」
そう言って近場のカフェを促す。
「あなたは何故、ここに居るか、考えたことはある？」
「流されてここに来てしまった、としか言いようがないですよ」

「いいえ、違うわ。全ては運命であり、必然。そう、Ｚがあなたを選んだことは」
「・・・・・・あなた、一体何者ですか？」
警戒して聞くカミーユ。女は笑って運ばれてきたコーヒーに口を付けた。
「アムロから聞いていないかしら、私のこと」
「？アムロさんから・・・・いいえ、ないはずです」
「ああ、名前を知らなきゃ、わからないわね」
コーヒーを置いて、真っすぐカミーユを見た。女の瞳が緑色に輝いている。いや、見れば全身がうっすらと輝いている。
「ふふ、驚いた？」
女が笑う。
「今、君が見ている私は存在しないわ。何故なら私の肉体は消えてしまったから。私の名前はセイラ・マス。ガンダムの最初の生贄、よ」
「なっ、だって、死んだはずじゃ・・・・・」
「そうね、普通はそう思うでしょうね。でも、私は生きているわ。ただし、それは人間、と言えるかどうかは別としてね」
体の発行が止むが、女の目は光り輝き続けている。
「ガンダムの中にある木星エンジン。そこにある未知の物質、ガンダリウム線・・・。私はそれと共に消滅したはずだった。でも、私は生きていたわ。体を構成していた分子は分解されて、意識は全てガンダリウム線に取り込まれたけれども。今、君の前に居る私はガンダリウムによって構成された仮初の肉体よ」
あっさりと言い切るセイラ。
「それで、そんな人が俺に何の用です？」
「遅かれ早かれ、あなたも運命を受け入れる日が来るわ。その時、どうするべきかを教えてあげるわ」
指を一本立てる。
「ガンダリウムに、身をゆだねなさい」

「つまり、死ね、と・・・・・？」
「広義的にはそれは死を意味するけれども、厳密には違う。ただ、少し人間とは違う存在になる、いえ、進化する、という方が適切ね。いずれわかる時が来るわ。それが素晴らしいことだ、と」
　コーヒーに口を付けて、息を吐く。その姿をじっと見るカミーユ。
「・・・何故、俺なんだ？」
「言ったでしょう、選ばれたから、と」
「いつ、だれに！」
「それは、ガンダリウムかもしれなくてよ？」
「・・・・・・・・・」
「喜びなさい、カミーユ。あなたは解き放たれる。人という、不自由な肉体を捨て、広大な宇宙と一体化する・・・・」
　女は笑う。静かに。だが、それに悪寒を感じるカミーユ。
「悲しむことはないわ。あなたは独りではなくなるのだから」
　カミーユが女を見るが、そこに姿はない。辺りを見回しても、彼女はいなかった。
「何故、俺なんだ・・・・・」
（ガンダリウム線・・・・・アムロさんなら、知っているだろうか？）
　恐らくは知るまい、と思った。そして、この話をしても信じはしまい、とも。
（これも、シロッコの計画なのかな・・・・）
　だが、そうでもない気がする。シロッコ自身も、恐らく知らないのではないか、と。そんな突拍子もないガンダリウム線のことを。

## 17

結局、心にしこりを残すカミーユ。彼は月の都市をさまよった。
ふと、子供が走ってくる。三人ほど。子どもと言っても、十代前半か、と言ったぐらいである。カミーユの体にぶつかる、子供の一人。
「うおぁ？！」
よろけるカミーユと、派手に転ぶ少年。後ろに居た二人の少女がそれを見て笑った。二人の少女は双子であるようだ。若干目元がつり上がっているかどうかの違いがあるぐらいである。釣り上がっていない方の少女が、少年を指差し言った。
「ジュドー、なにやってるのよー」
「うっせぇ、プル！」
向きになってそう言い返すジュドーと言う少年。立ち上がろうとする彼に手を貸すカミーユ。
「あんがと」
「いや・・・・」
その瞬間、何かが走った。カミーユとジュドーの間に。
（宇宙が広がっている・・・・？）
恐らく、ジュドーもそれを見ているのであろう光景を、カミーユは見た。
刹那的な時間。しかし、それは永遠に続くかのように思われた。
（この子は・・・・・・・）
疑念を感じながらカミーユは言った。
「ちゃんと前見て遊ぶんだぞ」
「あぁ、わかったよ・・・」
何かぽっとしない様子でジュドーが返事する。彼の体を二人の少女が少年の腕を抱え、先をせかす。それを見ながらカミーユは足を進めた。

「クワトロくん、部隊の方はどうなっておる？」
ほの暗い会議室に一人立つクワトロ。それを囲む、ホログラムたち。それらは名だたる連邦の実力者たちである。
「まだ戦力は完全とは言えません」
「それでは困る」
先ほどの老人が言った。
「君と、ブレックスにいくら投資したと思っておる？」
「まぁ、落ち付きましょう、少将」
連邦議員のジョン・バウアーが言う。
「幸い、ガンダムの量産はうまくいっています。そしてもう一つの計画もまた」
「もう一つの計画？」
クワトロが聞く。
「そう、Ｚガンダム。それを超える、器、だよ」
「・・・聞いておりませんが」
「無論だ、放しておらんからな」
狡猾そうな男が言った。ジャミトフ。ブレックスの政敵である。
「シロッコの木星帝国。それがたとえ倒れても、第二第三のジオン、木星帝国が出てくる。その為の抑止力が必要だ」
「我々は目先のことだけを見ているのではない」
「もしも、木星帝国を倒せないと言うならば、そのガンダムを使うまで」
「全ては君と、カラバにかかっている、ということだ」
バウアーが言った。
「君には期待しているぞ」
ジャミトフが言った。それを機にホログラムが一斉に消える。
部屋に明かりがともる。
（やはり、連邦も一筋縄ではいかんか…）

ため息をつくクワトロ。
（まずは木星帝国、か・・・・・。しかし、計画とはなんなのだ？）
ジャミトフはなかなか腹の読めない男だ。その男の動向も今後気にしていかなければならない、ということである。
（まったく、人と言うものは・・・・・）
部屋を出たクワトロを待っていたのはアムロであった。
「どうかしたか？」
「いや、少し気になってね。あんたの話していたのが噂のあれかい？」
「・・・・・そうだ」
「ティターンズ・・・。『巨神』か、傲慢だな。そんな連中が連邦を支配してるんだもんな」
「だが、今は彼らの力が必要だ」
「今は、な・・・・」
アムロが言った。
「あんたのことだ。このまま飼われていることに納得はしまい？」
「・・・・・・・・・」
「その時は、俺もまぜろ。面白そうだしな・・・」
そう言うと、歩を進めるアムロ。
「そうだな、ロンドベルなんてどうだ？いい名前だろ。警戒の鐘ってところだ」
そう言って去っていくアムロをクワトロは険しい目で見ていた。

「ん、どしたのジュドー？」
「いや、なんでもないよ」
プルともう一人の少女に挟まれてジュドーは空を見た。その上には宇宙が広がっている。
何かが光っている。そしてそれは何か怨念めいたものを発してい

る。だが、それが分かるほど、ジュドーは成長していない。
（・・・？）
眩しそうに見る少年。
そして、災厄の影が、静かに、月に近付いていたのを、まだ、誰も知らない。

## 18

アーガマに運び込まれるモビルスーツ。量産されたガンダムの姿も見える。ブラックメイオウも修繕されたらしく、アーガマへと運びこまれていた。
「それにしても、このアーガマでは十機詰むのがやっとだな」
クワトロが言った。
「まぁ、そうですねぇ。しかし、新しい大型艦の建造も進んでいるようですよ」
近くで作業していたアストナージが言った。
「ま、いつできるかわかんないもんを期待するのもねぇ…・」
「まったくだな。それより、あのギャプランはどうした」
「？まだありますが・・・」
「乗せたままにしろ。あの少女は使えるかもしれんからな」
「敵ですよ？」
「そのための、フォウだ」
クワトロが言った。
「子どもといえど、利用する。大人と言うのは汚いものだ。自分も嫌悪していたはずの大人になってしまう。悲しいことだ」
「大人になるってことは、そういうもんだ」
アムロの声がする。クワトロが振り返る。
「だからこそ、俺たちに続く若い世代には汚い大人になってもらいたくないってことだが」
「アムロ・・・」
「柄にないこと言っちまったな。とにかく、クワトロ。あんたはナイーブ過ぎる。そんなんじゃ、死ぬぜ」
アムロは運び込まれる自身の愛機を見た。
「さぁて、シロッコ。綺麗な面に、一発かましてやるぜ」

カミーユはメス、と言う少女を見た。やはりその身体は小さく痩せていて、兵士、とは言えない。幼すぎる。街でぶつかった少年少女。彼らと何も変わるところはない。そう、戦争に参加している以外は。

（そして、俺もその一人、か）

物思いに浸るカミーユ。そこに、艦内放送が流れる。

『カミーユ・ビダン。至急ブリッジに来なさい。繰り返す・・・』

疑問に思いながら彼は少女の部屋から去って、ブリッジへと向かった。

（俺を名指し、か・・・・なんだ？）

ブリッジに上がると、ヘンケン艦長と、二人の男女が居た。二人とも四十は過ぎている。青い髪の女性と、金髪の男。いかにも技術者然としているその二人を見て、カミーユは一瞬止まった。

（・・・・・！！？）

もう、直接顔を見るのは何年振りだろう。

「父さん、母さん・・・・・」

複雑な思いを抱えてカミーユはなんとかそう呟いた。

「ん、カミーユか」

父親がメガネの奥の瞳を引かれせてカミーユを見た。母親も、カミーユを見ていた。それから逃れるように、目をそらすカミーユ。

「大きくなったな、カミーユ」

父親がそう言って、カミーユの肩に手を置く。

「まさか、お前が選ばれるとはね、母さんは心配したのよ、カミーユ」

母親がそう言う。

「父さんも心配していたんだぞ、カミーユ・・・・」

そう言う二人を目を鋭くしてみるカミーユ。胸に込み上げていた思いが口を出た。

「ならどうして、俺のそばに居てくれなかったんだ？！」

極めて冷静に言ったつもりであったが、絶叫したような声が彼の

口から出た。そして、踵を返して走り去って行った。
両親はそれに驚いた。そしてそれを追いかけようとして、辞めた。
「・・・・情けない、親ですな・・・」
沈んだ声で、父親は言った。
「・・・・心中、お察しします」
「ありがとう、艦長」
「あなた、いつかは、あの子もわかってくれますよ・・・・」
ヘンケンは気まずそうにそれを見ていた。内心では、子供ができれば自分とエマも、このような親子関係になってしまうのだろうな、と思った。
（珍しいことではない。だが・・・いいことではないな）
ブリッジの下を見る。まだ、搬入作業は続いている。

月のフォン・ブラウンより少し離れたところにライラ・ライラのガルバルド隊は控えていた。
「け、何であたしらがあんな奴らの援護何かを」
愚痴るライラを部下たちはなだめた。
「仕方ありませんよ、隊長。シロッコの命令ですからね」
「ですが、俺らもやってやりましょうぜ。戦争で活躍するのは、あんな奴らではない、前線に立つ、俺らだってね」
「はん、ナマ言ってんじゃないよ。いっぱしの口吐きやがって」
ライラが笑って行った。
「ん。来たようだね」
見上げた空間に居る、バウンドとバイアラン。その後ろにも続く機体群。
「新しい量産型、かい」
「俺らのガルバルドにかなう奴なんてありませんよ」
そういって鼓舞する隊員たち。
『ライラ大尉、これから攻撃を仕掛けます。援護をお願いします』

サラが無線でそう告げてきた。
「わかったよ、嬢ちゃん。がんばりなよ」
そう言って操縦桿を強く握る。
「さぁ、派手にぶっ放すよ、野郎ども！」
ガルバルドが月の都市に向けて飛び出す。そしてライフルを構え、攻撃を開始した。

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

---

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3291k/

---

ジュピターガンダム対Zガンダム

2010年10月13日11時45分発行